

記主禪師行狀繪詞傳

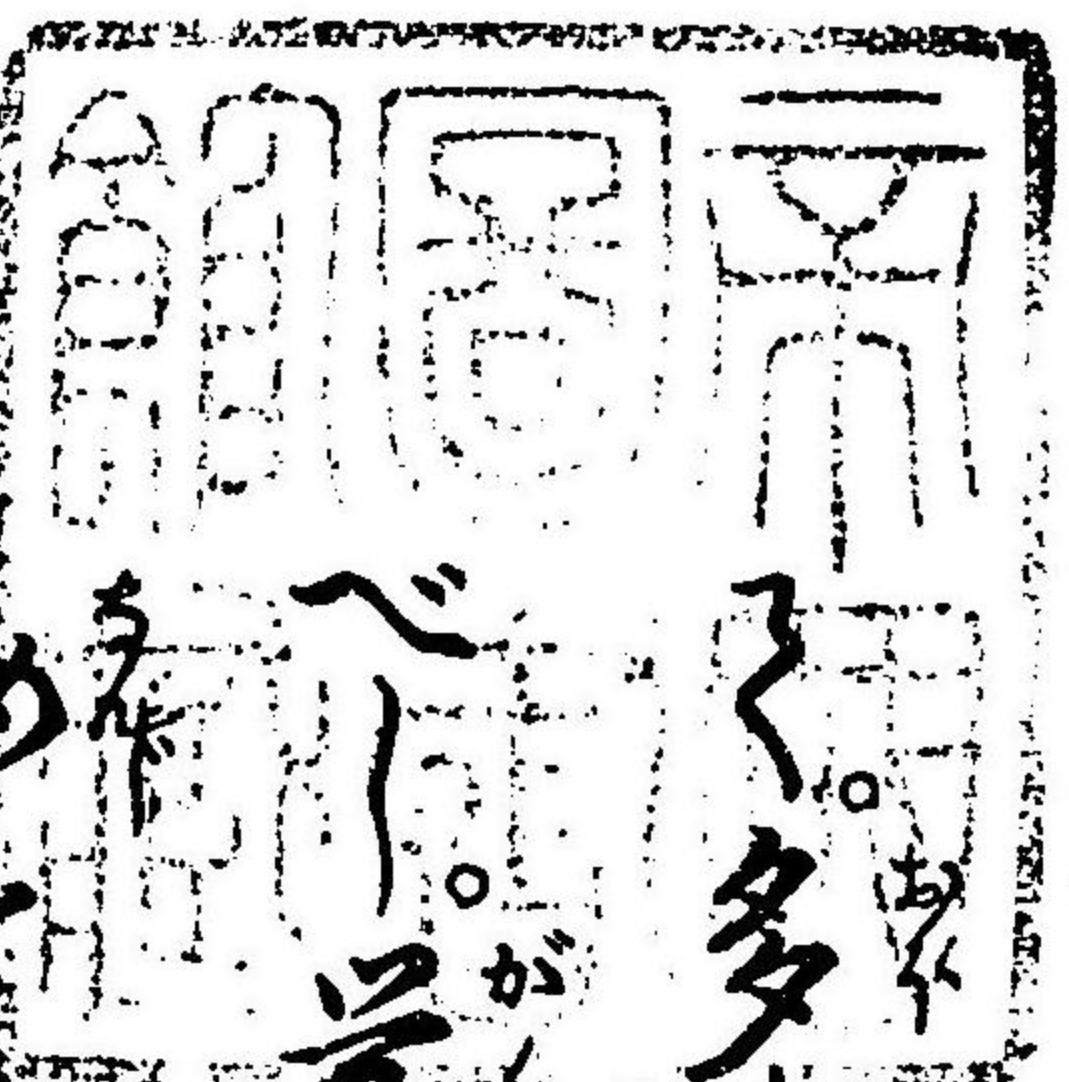
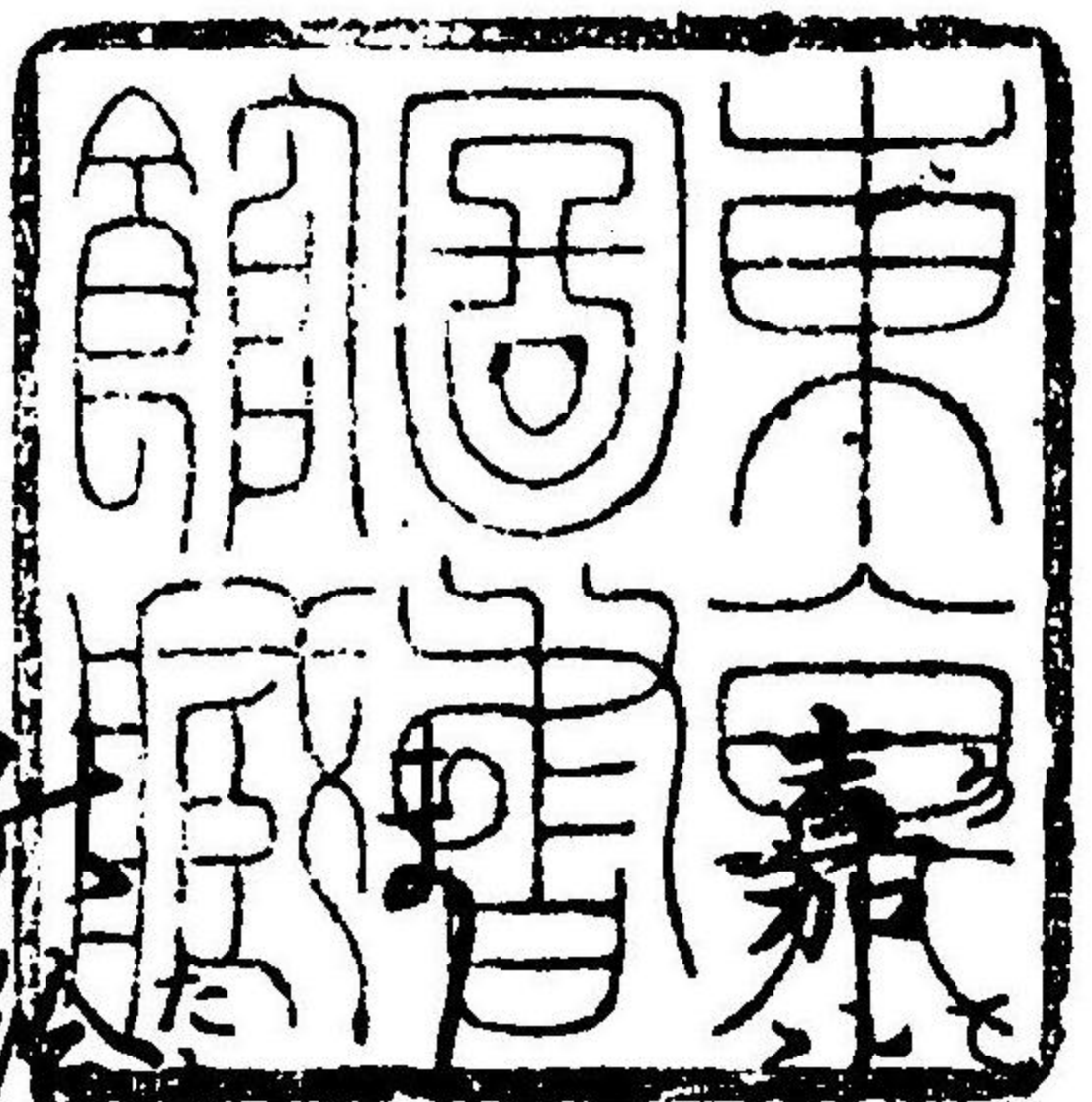
吉水玄信著

三四

東 京 圖 書 館				
三	一	六	三	
冊	八	架	函	類
	二			
冊	號			

明治十八年十二月七日内務省贈付

記主禪師行狀繪詞傳卷三



嘉禎三年秋七月六日上人善導寺の塔中より

くく。聖護房を使として。師を召て告く

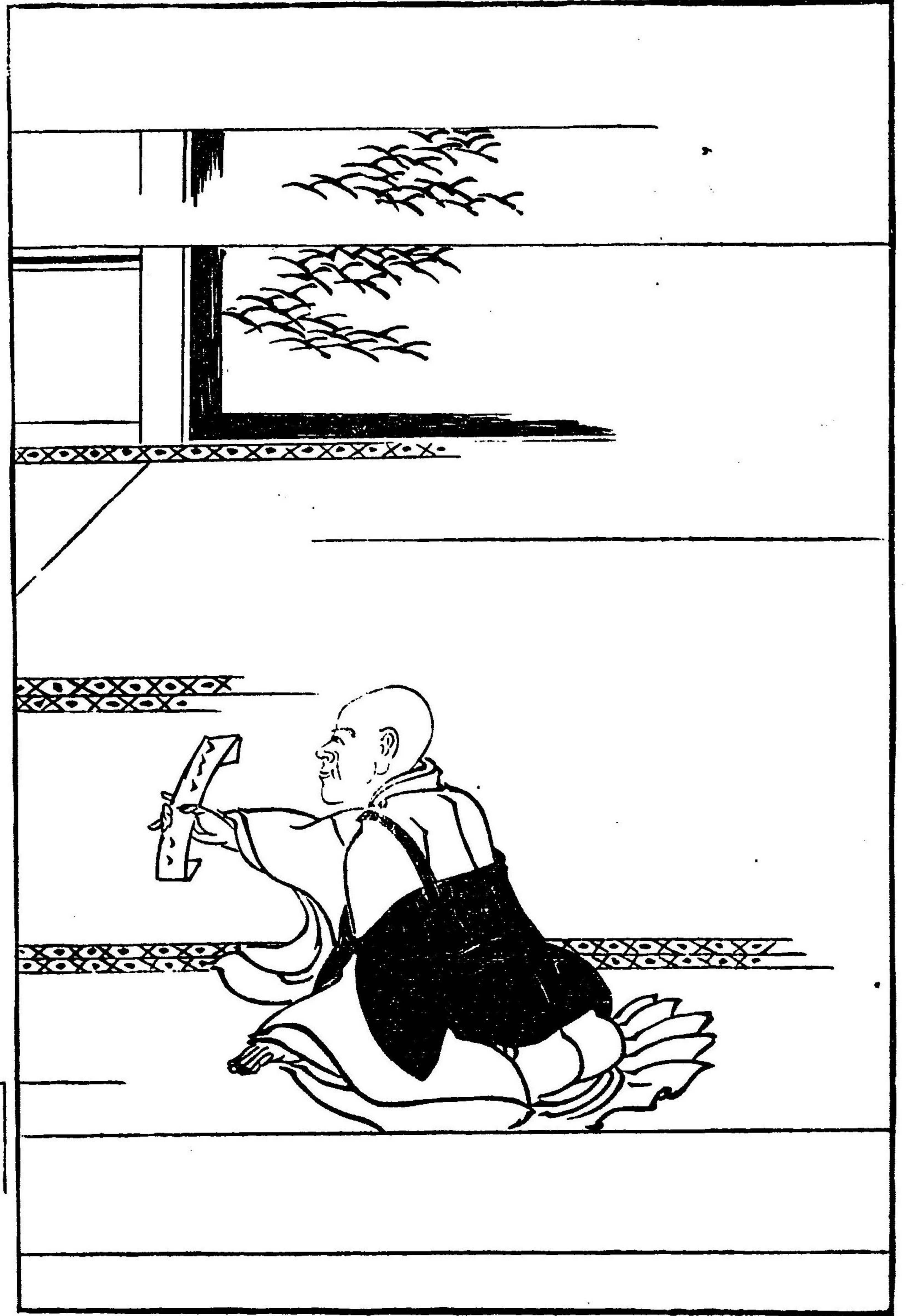
く。故法然上人門弟の中に冥頑の輩あり

く。多く先師の御教を躓り。予が門人も亦然る

べし。學生にあはれむ。師説を傳へり。其の故ふ

海を多しびて我義を付属す。よはく來世につこ

て。蠢徒哉曉悟まらざる。云云



同八月朔日上人まげく紫毫を書し。正しく
手印をくはして。璽書を賜りけり。其詞曰
法然上人以淨土宗之義傳辨阿今又辨阿以
相承之義並私勘文徹選擇集讓與沙門然阿
畢聞之人慥以信之行之可被遂往生仍錄秘
法之狀以手次

于時嘉禎第三歲八月一日

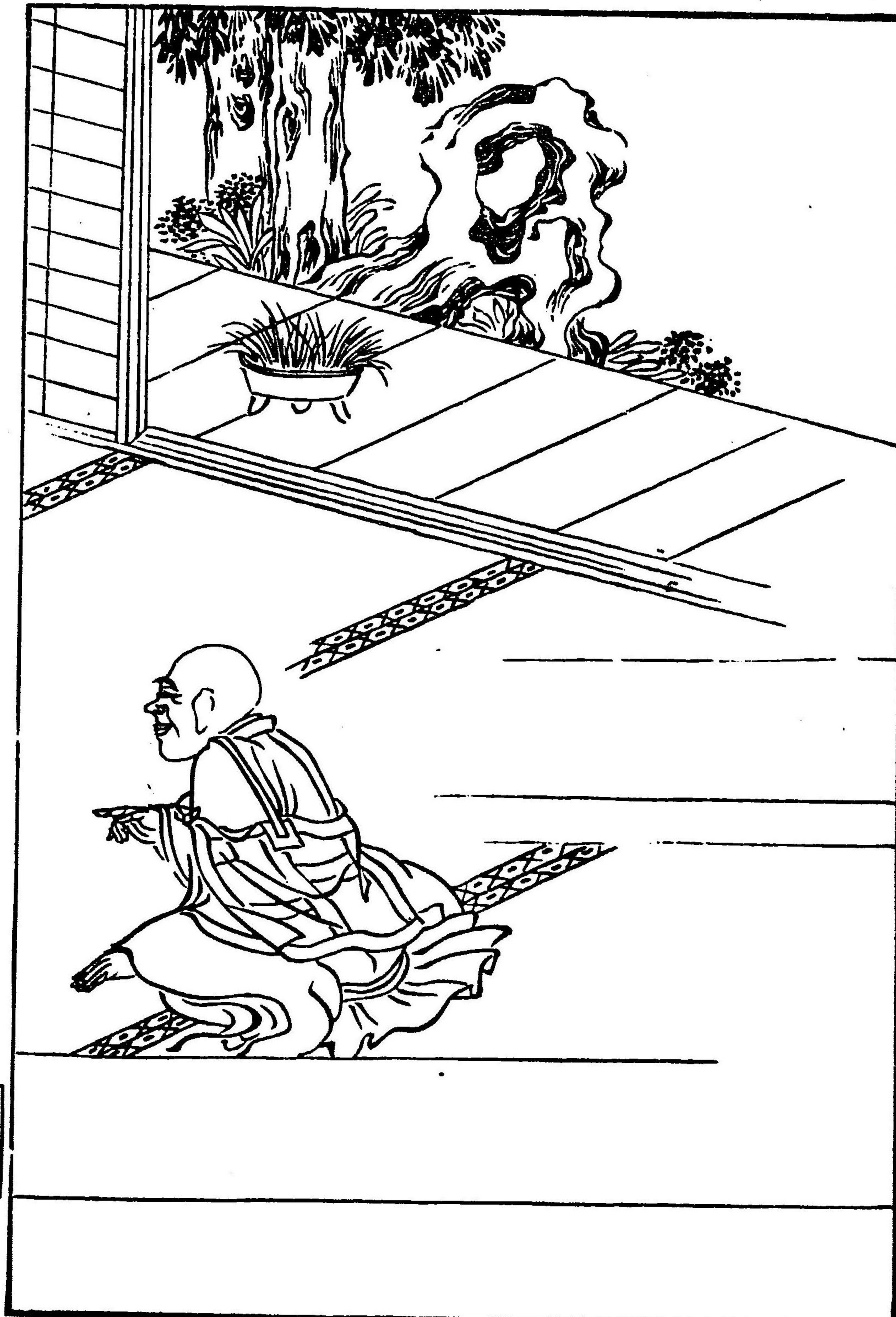
法然上人口決沙門辨阿華
押

この日まゝ圓頓戒許可を志して師に告はらる。
此時南岳大師より傳來志しり竹布袈裟
と。妙樂大師乃十二門戒儀考を添く授らまはり。
圓頓戒の正脈を家門に傳へて是よりけり
にけり。

上人まゝ衆に對し示して終る。わきまだけ
能傾ぶたり。在世しきかず。將來の癡癡を思

ふり肝腑やすかゞ。然るに法を然阿し授
おもしろぬ法燈何ぞ消ん然阿を予が若くもれる
なり。遺弟不審の義あゝ。此人し決すべし。云
師常にこの御詞をいひ出く曰く。汝も弟子
宿因ありて。寤曉ふらへりや。いづとも。たほらるる
縁法く。終ふ奉事や。これ我彼辞弄言たり
といへば。こそきたる。た思出ちり。まゝ。過分の遺
誠ありとて。涙を流し給ふりともん。

同八月三日。師善導寺においで。一巻の書を著し
て。上人に見せたくまゝ。其書我領解末代
念佛授手印鈔と名く上人見給ひく。左右あ
く。こそ我印可志給ひく。り。領解のたむ。我
疾く師匠の沛意にかなへり。かゝるごとく。
あゝ。びて付属志給ひ。色う。さき。らるる。い
た。と。に。ら。う。



上人じやうじんにある時とき師しに示して曰いは傳でん法ぽう既すでに備び足そくせり。
人命じんめいハ無む常じやうなるるあざかそ風ふう燭しよくノ類るかノ朝あ
露ろに似にきり予よハ八はち旬じゆんに迫ちぢり餘よ命めいいづばくえあ
らず佛ぶつ法ぽうを東とう漸ぜんなり汝なんぢ中ちゆう國こくは東とう縁えんにまゐる
く浄じやう土どは法ぽうを私ひ通つうきべしとわん命めいぎられ
たる

ある時とき要やう阿あ彌み陀だ佛ぶつ日にち中ちゆうに睡すい眠めんたりける。後のち
法ぽう水すい統とうの華け基き房ぼう善ぜん惠ゑ上じやう人じん弟てい子し來きりて以もつはく。若ごと導だう寺じ
の上じやう人じん示しして給たまはく。文ぶんをば諸しよ佛ぶつの教きやう意いり
見みりきく。義ぎをば極ごく惡あくの罪ざい人じんも往わう生じやうするやうに。
述じゆつぶきなりや。此この御おん示しを心こころにかけし珠たまりたるごとく
覺かくゆるなりや。語ごふをまじり上じやう人じん先せん臨りんありしう。バ
要やう阿あ彌み陀だ佛ぶつの趣しゆを述じゆつべし。次つぎ上じやう人じん答たうはく。の言ごん實じつにり
あり。たゞ今いま度どの談だん義ぎをいまり委い悉しつたるにひび。

僻言りや相まぐらむ。さきごと發起の然阿然量の仁
ちれが。後日に書ちふすべからりと仰らるるを見て。
爰言ぬ即時小爰のやうを自房に柱し書つけ
おたぐ。其後畧鈔を師に請しやさきけり。
然師著述の鈔記五十餘帖をすべし報夢の鈔
と。中作らるるの故あり。嗚呼上人の付属その當
器ちるること哉。志の夢し驗しと師乃所述をまは
はす仰信まらに足まらるるのう。

報夢の五十餘帖と。往生論註記五卷。安樂集記二
卷。和尚の九帖疏書記二十三卷。宗要鈔五卷。往生爲
集記八卷。選擇集鈔五卷。授手印領解鈔一卷。同決
答疑問鈔二卷。三心私記一卷。徹選擇鈔二卷あり。この
外し三十餘帖あり。六やうぐく相傳の旨を記し。
兼し經論の明證を勘付す。慧解深遠ちるるや。
卷を開きとて志かべし。

嘉徳三年八月下旬師上人喟命の重たを負ひ
摩下を離れて東下し。浄教を弘通せんや。思
ふたまふ。時に上人わをばつて示誨し。あ
のまうく。汝の傳法の恩を報ぜんとおとす。
都鄙遠近小浄土の法門を弘め。邊陲遐陬に念
佛此要行を成し。濁世淺末の迷徒を化導
す。と云云。昨哽咽して答ふること成得ず。
涙をおさして退出し。給ひぬ。委属肝に銘じ。誨

三ノ二

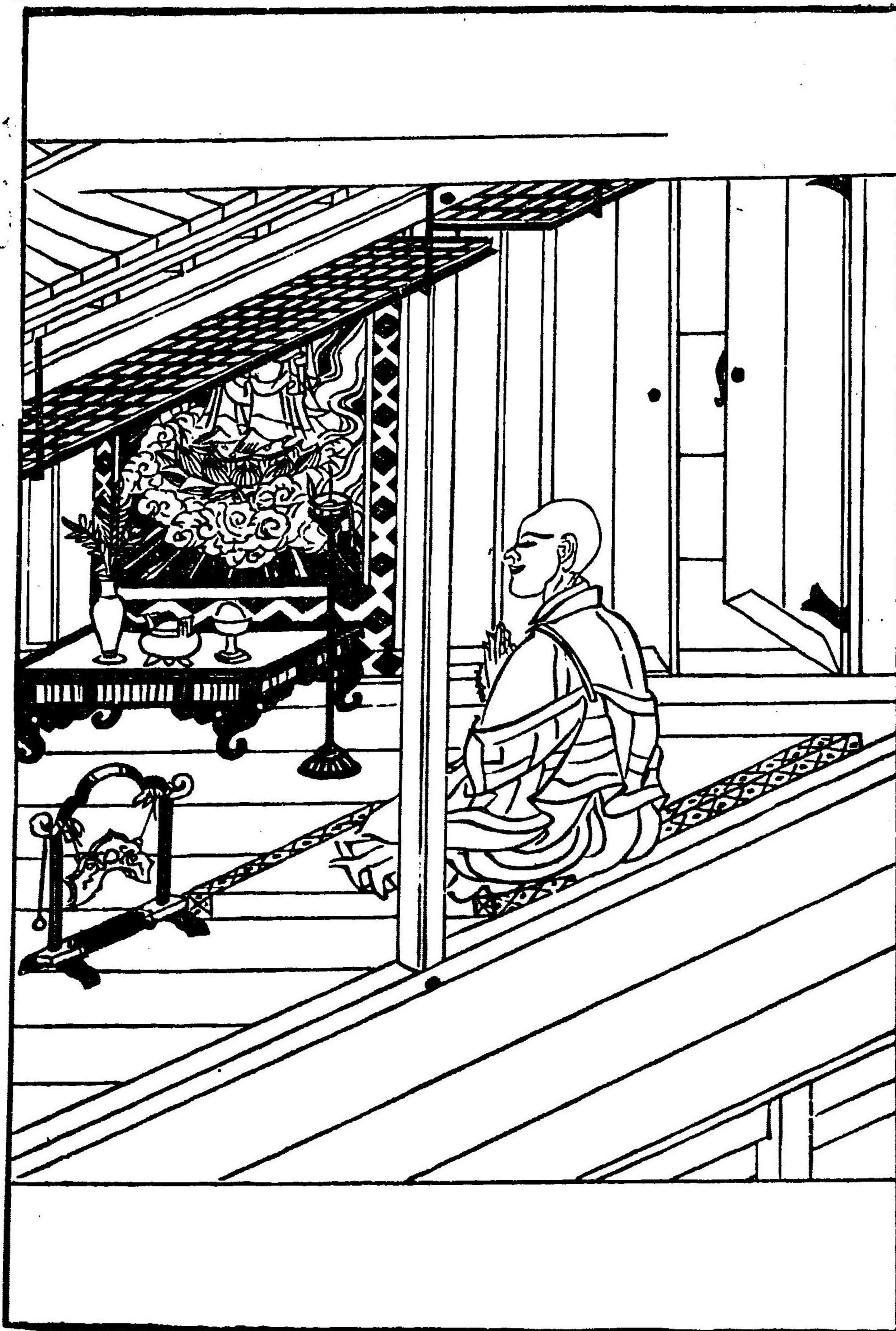
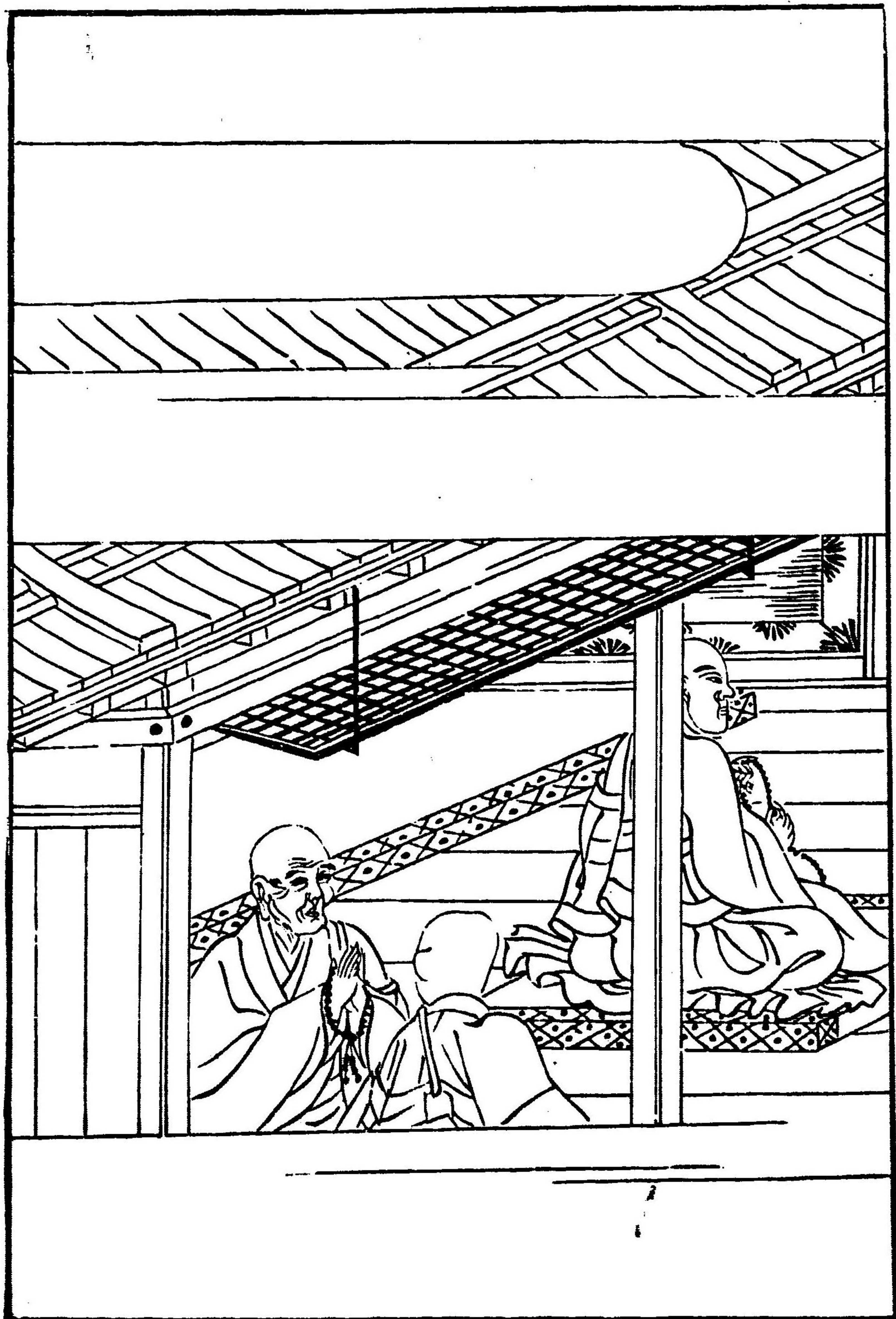
諭らるるに憐れく忘教く。こまより負笈振揚し
て。諸國を行化志すまふ。其後の翼従すること。
雲北龍に随ふごや。高れ山哉圍む小似きり。
浄土の正教。日を追て東漸し。今にいきりて
全國に隆盛するハ。六の昨辨にりて此資然有
ゆゑちりけり。



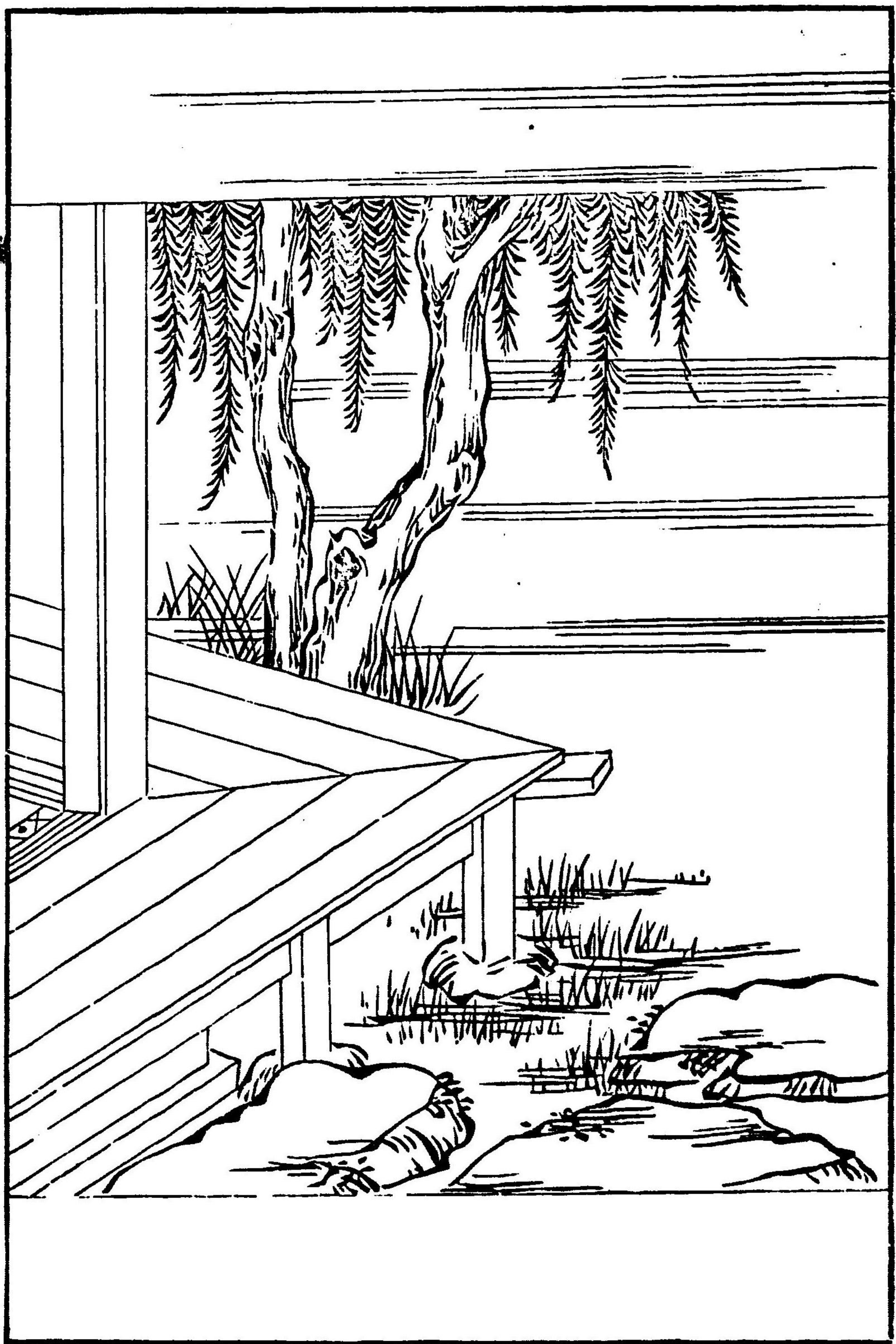
同八月より。まづ安藝國小まうて。淨教を弘通し。
自利利他の行化供むらさる。道俗を
勧誘したまふ。歸依渴仰の業あかりなき
む。有縁の受化すてが。留湯して春秋三
季を經らまらる。

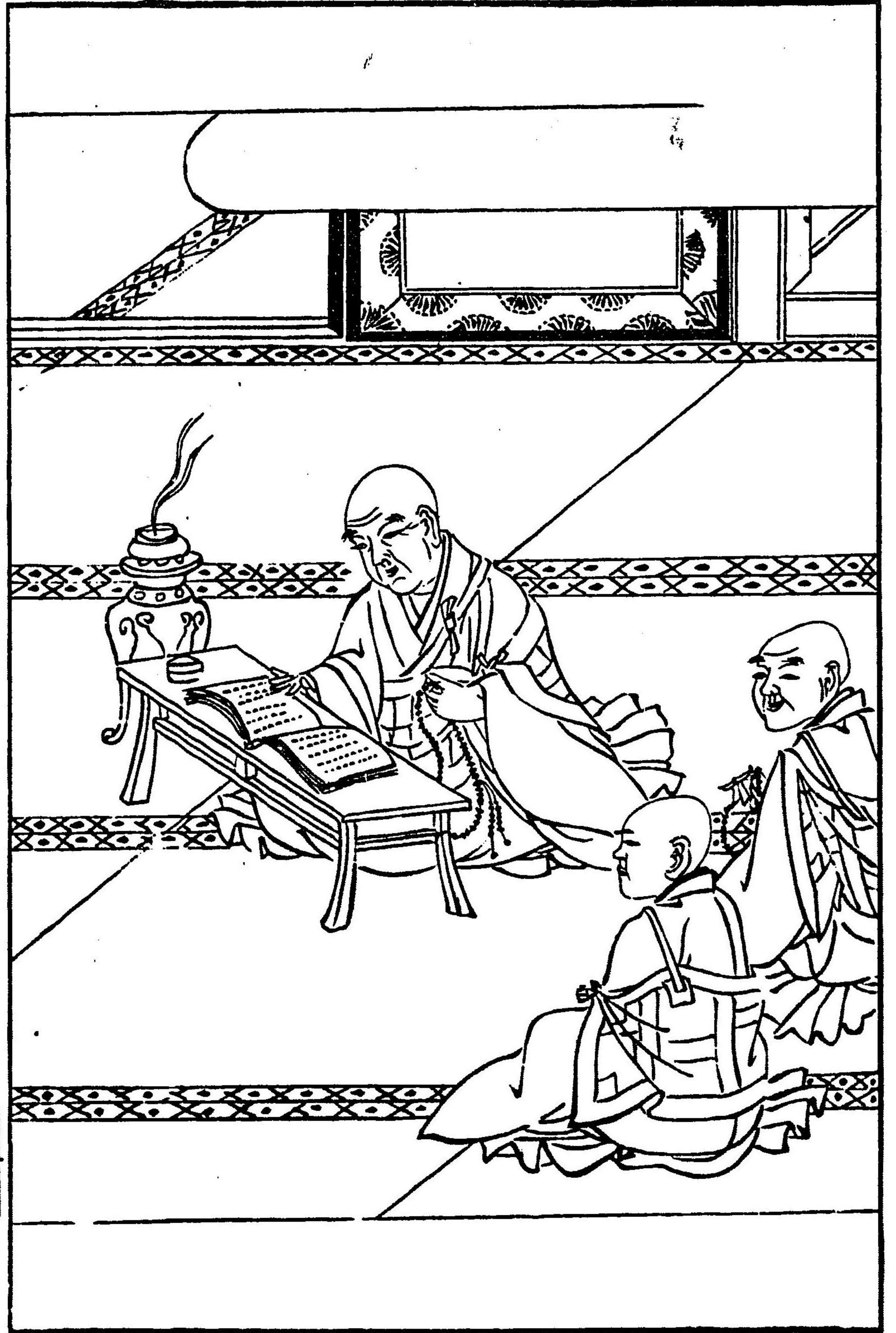
同十月善導寺の上人。不豫のこゝを傳へまら。
師と殊らうに。上人病苦消除の旨。ひつすら
懇祈志すまらる。

嘉禎四戌年上人の病痾やう。重りて。終り
閏二月二十九日。御往生の趣を。生者必滅
と兼く。覚悟せらる。無常轉變今まら。けやうに
おぼしき。悲歎志すまら。限らる。鶴林燈を
の。慈く一身にあはまら。純孝の子れ。父母を
失ふ。ひく。あまら。やぐて。誦經称名。祓を
ごらに。教授の恩を。報謝志すまら。あや
かりけり。



延應元年己未。師四十一歳の春帝京に登りて淨教
 正意の旨を弘宣せしむ。聖覺法印の妹尼公名
 淨意。師を請して教示を乞はるにすれり。選擇
 集を講ずらまきたり。尼公聽おりて我むの故
 法印の義をききしに。今の義勢と初きをあがふ
 ことあり。彼人すまらざる吉水の清波ふ浴し。らる
 師まゝ愚谷の正流を汲む源すでに同く澄り。流
 あり濁ることをあはれんや。とてうやまされたる。





昨いまご上人ふ。謁したまはざる。対しやありけん
竹谷洛の清水の乗願房ふ。對面をらるる。ゆりなき
昨同くいさく。吉水の送弟。其義水火なり。志つそ
おのく相傳と称す。真偽いけまざるやと。乗願上
人示し。いさく。當時の人。興盛の義。ごをひ
とらも。故吉水の御義にあはる。雪光房の上人
と。學者ちる。うへ。多年。稽古の人ちり。ひとへ
らま。吉水の御義ちり。不審におよばざる。こや

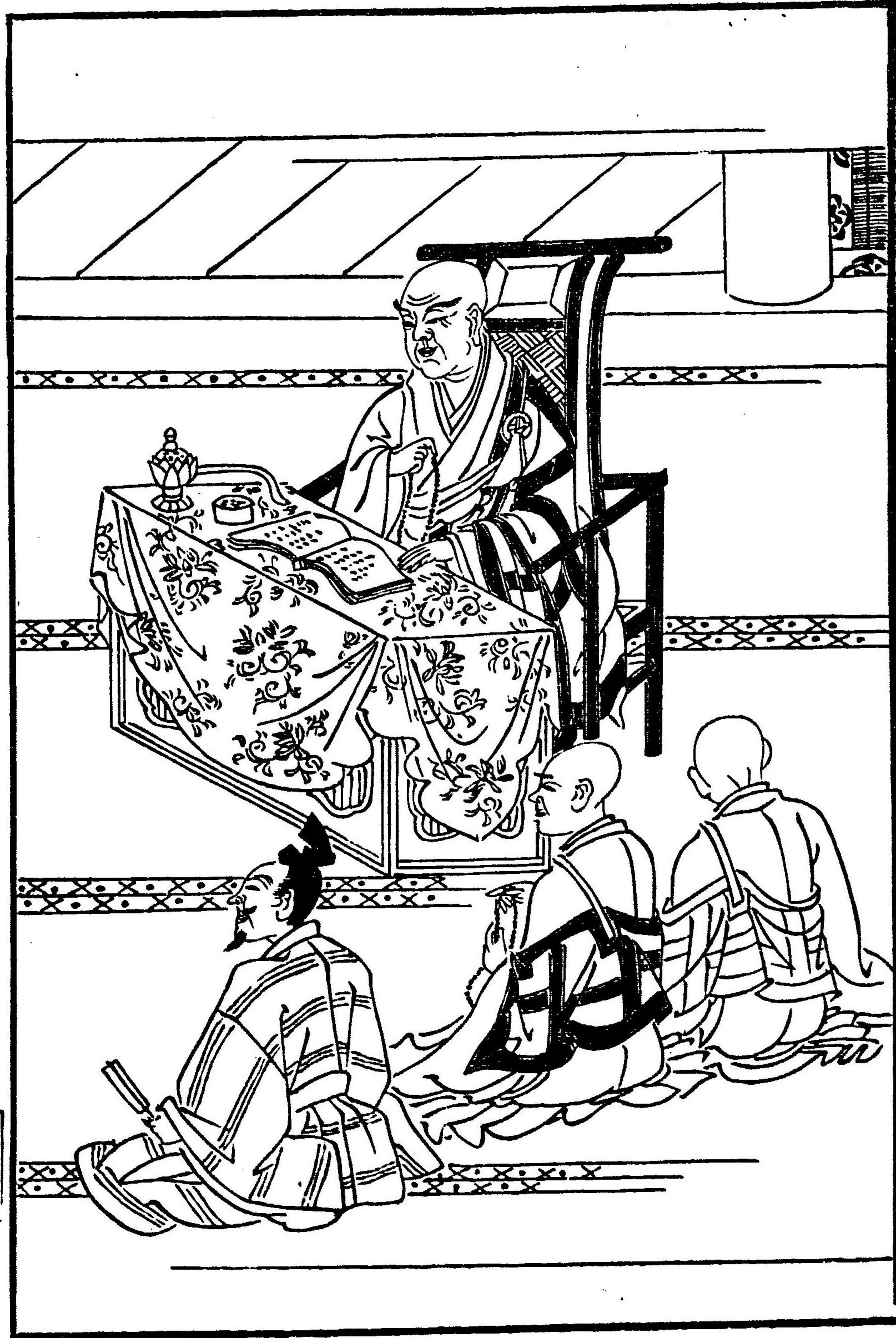
ちり。みる。偏頗しあはる。偏頗を存さば。京
申の人。越こそほめやべく。ゆへ。のれども
飛得ること。ちまき。まはる。言を述す。さ
かまきける。は。系。上人。大師。面受の徒弟
子。法門。親承。乃人。ちり。ゆ。多。小。師。も。ま。仰。信
して。抄記の。所。は。師の。口。説。を。の。き。引。證
志。あ。り。ける。ち。る。べし。

昨。東山道。を。遊。化。し。信。濃。國。筑。摩。郡。松。本。

に。教月教化ありけり。師所居乃学庵年ひ
くく。師の遺跡をたふとく。一宇の寺
と。良忠院生安寺と名けけり。

善光寺に。一光三尊此まゝに。衆
々。稱佛の候。浄教を弘宣し。ま
ひたる。發心歸仰の。此を。ちより。法

さひ。教化を。か。か。けり。
其。芳。蹟。は。一。寺。と。も。り。今。も。西。町。に。西
方。寺。と。稱。す。る。伽。藍。と。ま。り。けり。



同國更級郡五明郷少く。あふ人の跡を屈請する
によりて。四十八日をト。善導大師四帖の御
疏を講演志す。此人あがく。依一。信心
無二の称名乃行者とありけり。後一。一寺を
創立し。良忠院西教寺とよぶ。まきはら
跡を開山とせり。

これより東向して。上野下野武蔵上總下總
常陸等縁し。志すがひ請ふ。まはらせ。遊履し

行化し。ひろく淨教の真門を法ど。あまのく
は称の行業を勤め。まけるに。道俗市をな
し。鱗介の神龍。宗するが。浄土の
正風。麁き専修の法流。浴する。の。け
るか。ぞ。べ。改宗歸化の門。弟も。ま。か
かまける。

師武蔵國橋本郡矢向郷のあり。哉行化あり。

時路傍の古川の水中に光明赫奕して照耀
せり。何ものによと足をとぐ多くと見給ふ。佛群
の如く見えけき。師づつ々水中にありて
まきらげたまふ。茶師如來の像ありけり。さて
ハ護送極楽の本願ありた有縁の如來ありとて
けまふ。小庵をむすびく。尊像を安置し。供
養まじまじひかり。さるほごに諸人あつづつ
まうで来りて此庵をよびく。良忠庵とて云

ひかり。師づつ々肖像をほくろりて。木の庵
造したまふ。依敬信のこととて。不求自得の利益
を得く。灾障を遁まじふのありとて。いは乃
程よりの厄除の尊像と稱しける。其靈像支眼
より。舍利七顆を現し。今ちか影然つる。矢向村
良忠寺の尊像とまじり。

延應仁治乃頃下総香取郡福木郷よ千葉の一

門少く。楠木九郎胤定入道在阿といふ家あり。
おが城内一寺を創建し。師を請ひて
冥山とせり。楠木山胤定院光明寺と号す。師猶
倉入り入る後もよりくこのまゝに在りて。
決疑抄。三心私記傳通記等を記さるれり。

師嘉禎三年帰入浄土のはげしきより。私あ十年
施化利物此おもるままで。東奔西馳してあまの

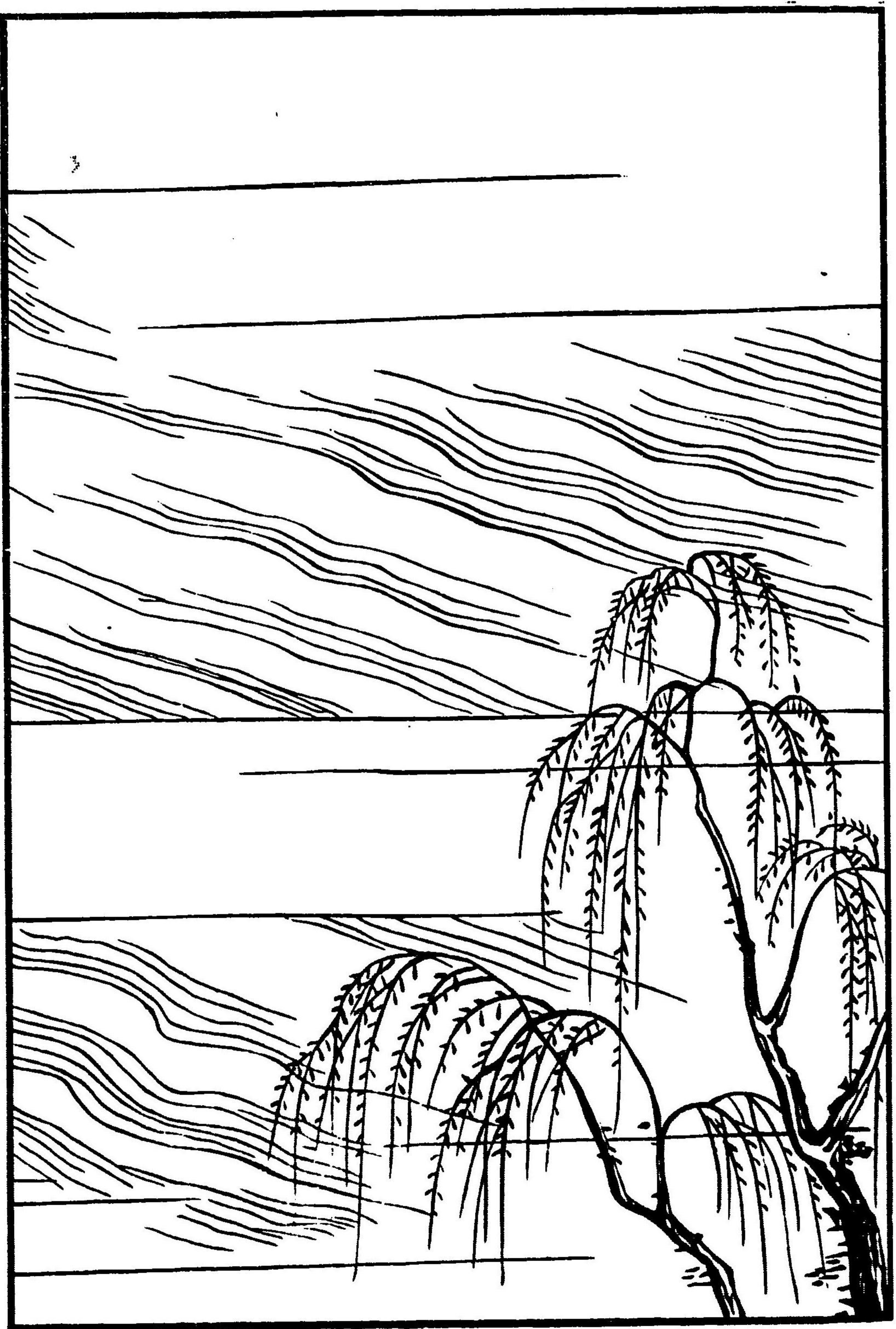
く浄教を私宣志たまふこと。すべて五十餘年。
其間の事實具ふ如く。帰仰の道俗一寺を
創立し。あるひは田場弘化の跡一寺とあり
ありて。開祖とありたまへる精舎四十八箇所
今も三十餘箇寺を存在せり。

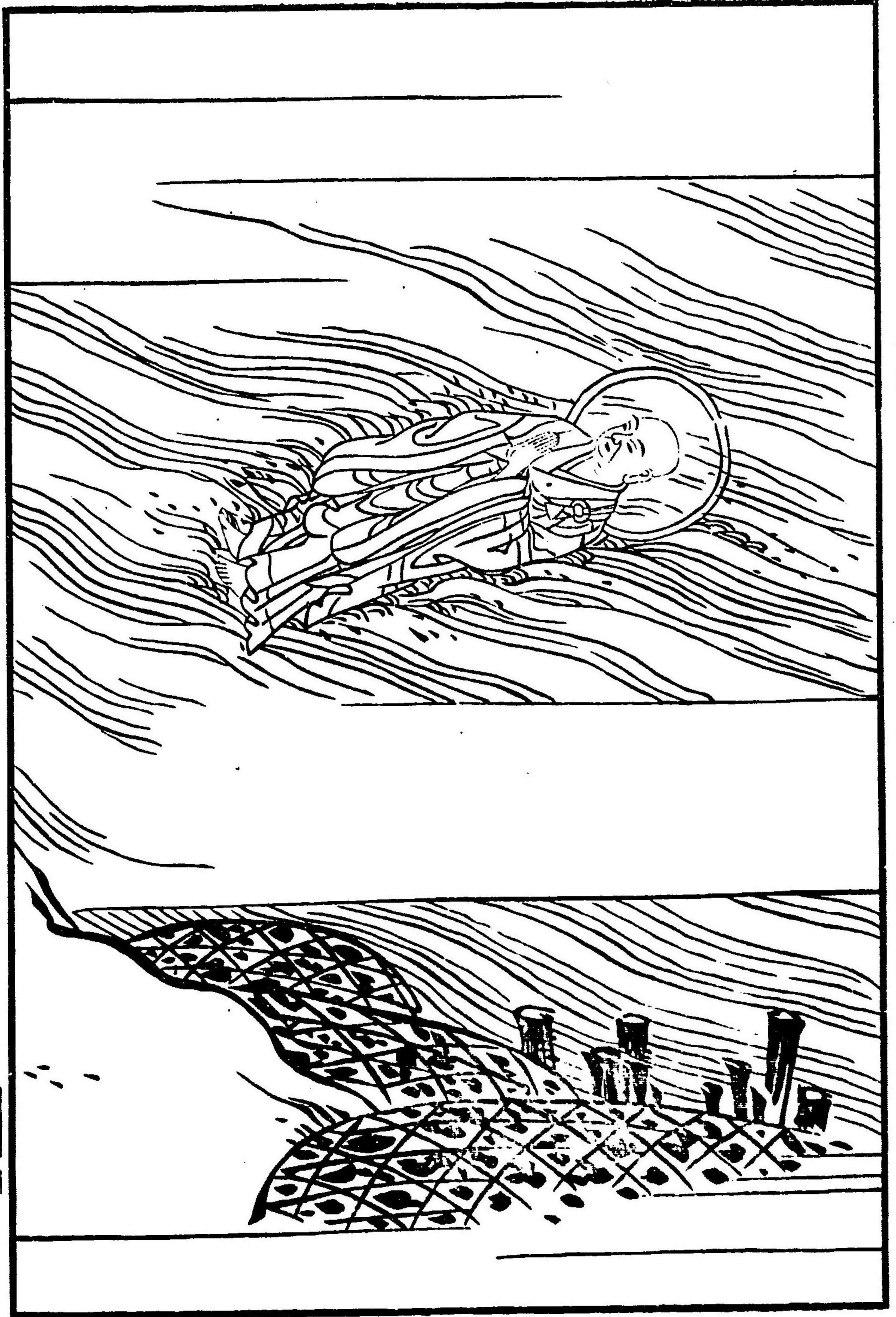
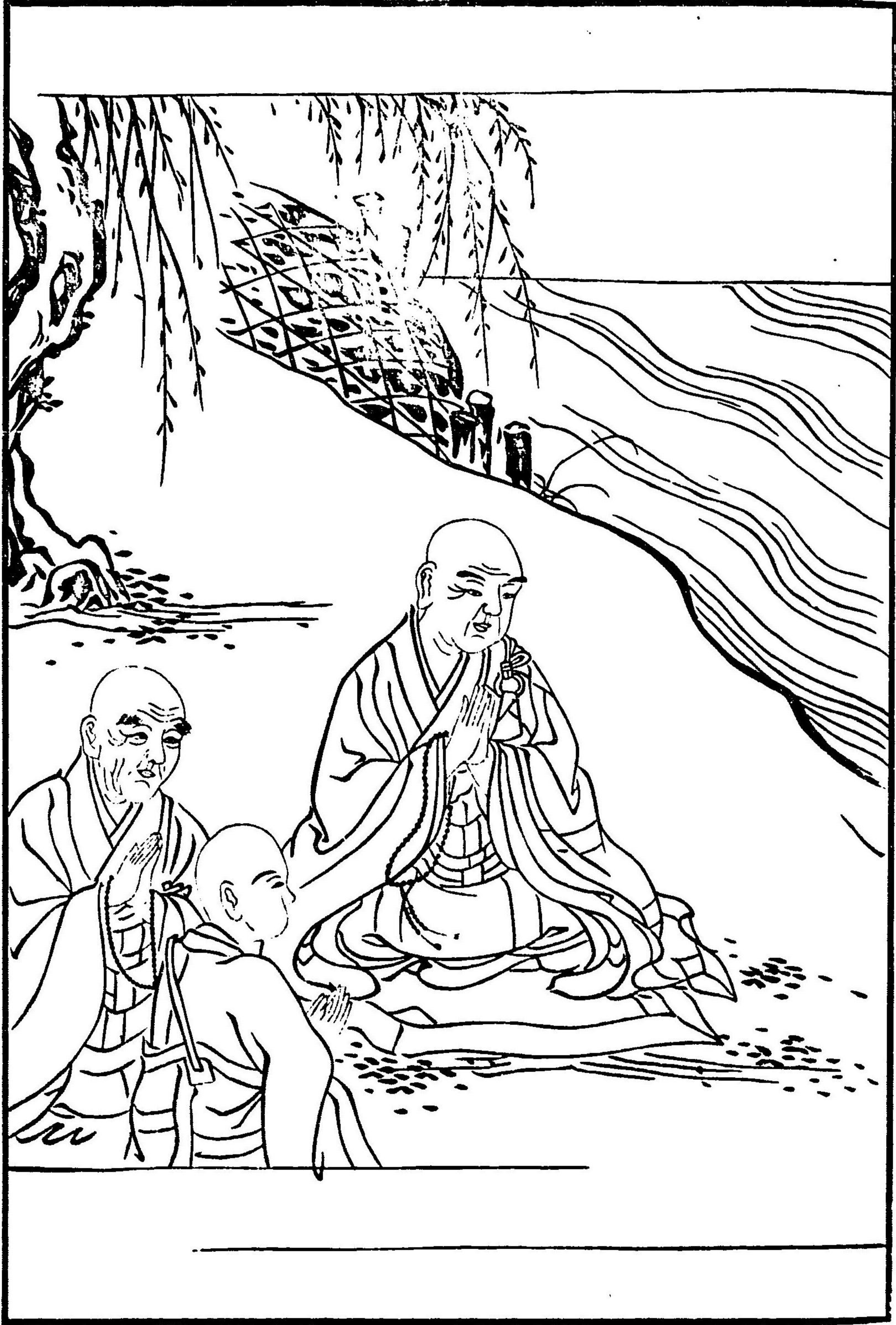
記主禪師行狀繪詞傳卷四

仁治元^{にんぢげん}庚^{ねん}子^{ねん}年二月師四十二歲始^{はじめ}々々相州鎌倉^{さきうらまぐら}に
い^ま里^り住^{すま}吉^{きち}谷^{たに}悟^ご真^{しん}寺^じに^てく。浄^{じやう}教^{けう}を^を煽^{せん}揚^{やう}き^きり
々^りり^り武^ぶ家^け輻^{ふく}輳^{さう}の^の地^ちに^にく。諸^{しよ}人^{にん}都^と
會^{くわい}の^の所^{ところ}ち^ちり^り々^々々^々。士^し庶^{じよ}の^の歸^き依^い少^{すく}か^かく^く。宗^{しゆ}教^{けう}日^{にち}を
か^かき^きわ^わく^く感^{かん}あり。

まへ。ちんぜい
まへ。ちんぜい
善^{ぜん}導^{だう}寺^じ上^{じやう}人^{にん}
一^{いつ}宗^{しゆ}の^の秘^ひ蹟^{せき}相^{さう}承^{じやう}あり^り々^々。時^{とき}印^{いん}璽^じの^の傳^{でん}衣^え戒^{がい}本^{ほん}

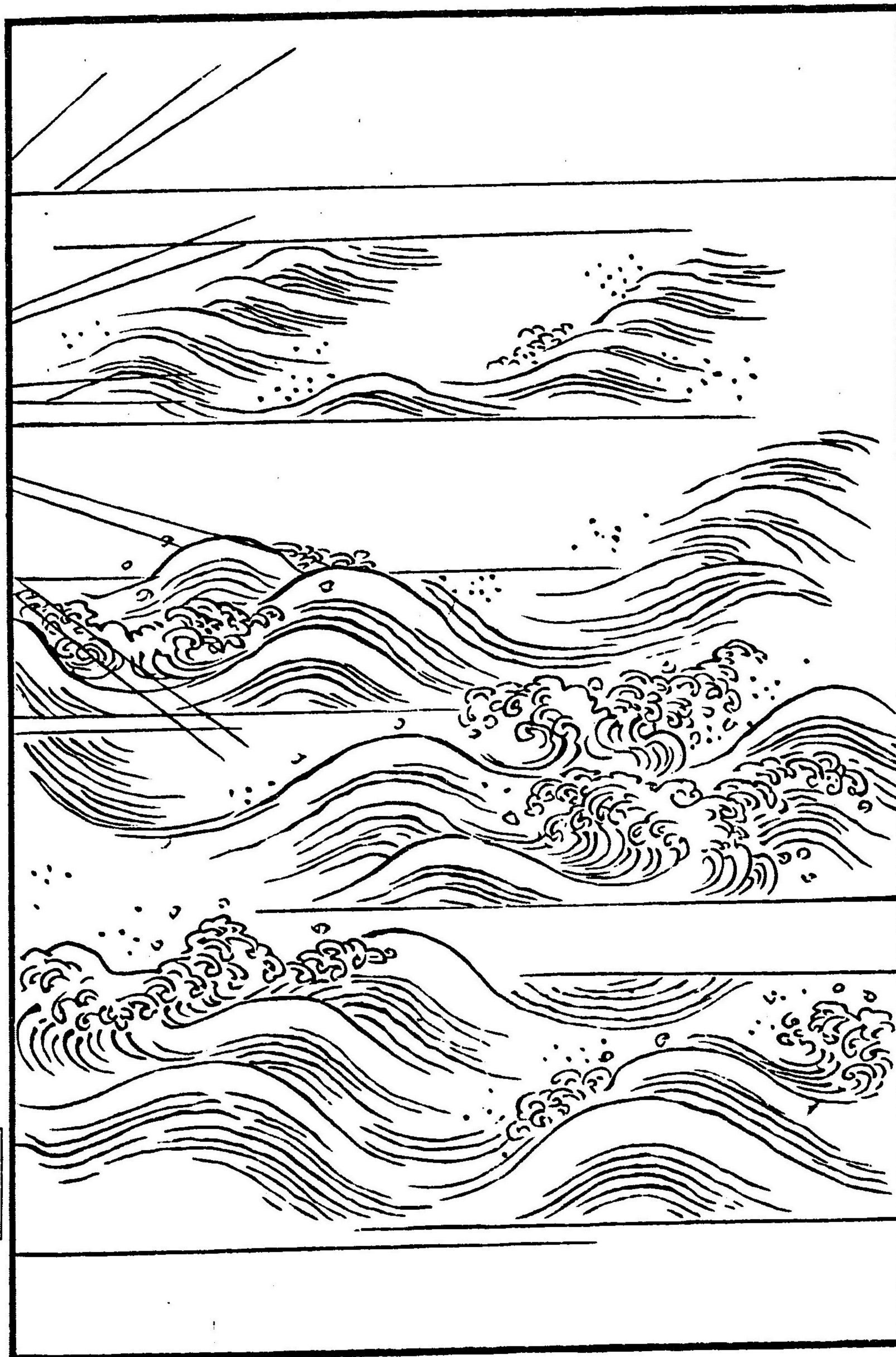
なすびり。唐土来現の善導大師乃尊像。船
 板の名海。悉く附属とす。大師の像ハ
 諸國行化乃身もまご。奉事するこゝろを得ん
 く。すれもらき像の前に祈誓し。ゆ回く。おそ
 より東下とす。教化を諸國に及ぶ。むとんわが
 化導有縁の地あは。かす。ず流きよま。跡を
 さらたまへや。涼く。く。筑後の國に。歳川
 に發遣し。ま。り。







衆人奇異のまゝに
かゝるけり。
滑原



この尊像。晝夜六時。一念佛の法門を宣説。志すま
へふ。これ往く。強法す。江鴻辨財。このつけ
させたまひ。いふれど。あつしと申傳ふ。さきぞ
年来諸人歩をまじびく敬信。詮益哉か
ぶるものをも多うけ也。

抑この善導大師。皇國より東現の縁由をうけ。ま
ちるに。昔建曆二年。三月十四日。聖光上人。般舟道
場入り。口稱念佛。志すまひ。忽然と
一人の高僧現。告ぐ曰く。これと
善導あり。早く志を博多の津より迎ふ。こ
こ上人夢覚。志の告よ。わらわらた拂。彼津
に。いひ。見たまあり。折う。唐土より歸
港の船あり。そ船師乃曰く。志始。宋朝を離

く出船せんとするに一人の僧来りて。わんごら
く同船を乞ふゆゑなり。そのころ
に海上半途に悪風起り。怒濤山の如
くに。船まことに覆らんと。船中此の如
いふかゝる難風。河を渡る僧。乃ち船ありあるゆゑ
疾く僧を渡り。沈むべし。被僧自
若くして曰く。我を沈めず。むご。何のなる
し。あゝ。いづく此難風を救ふ。船板小

六字の名簿を書き。衆を勧めて念佛せしむ。衆人
必死の念あり。高聲念佛を起す。奇なる
う。風や波静まりて。舟もゆる。著岸なり。
彼僧も今朝疾く船をいで。むご。松林乃
ちらに入き。法を説く。舟のうらやまに
上人笑す。舟に彼跡を追う。たづねまに
松樹の下に大師の本像儼然と。立ちたまふ。
容貌爰見。たがも。生る。如く。傍に船板あり

て名號を筆ひつしあり。上人せうじん信感しんかん肝きまに徹てつし。これす
まじら未代まじらの衆生しゆじやう念佛ねんぶつ往生じやうじやうの證信せうしん小田せうでんたまふ
なまふべし。喜涙きなみを押おさへ。この像やうを負おみもてあり
て歸かへり。やうて其地そのちに精舎せうだやを營いんぎやうて。供養くやう
したまふ。其寺其寺を行令其地の善導ぜんどう寺と稱し。のちに筑後ちくごの善ぜん
導どう寺に移うつりて。恭敬くげう志したまひ。つるを。かひて是これを
も師し。付属ふぞく志したまふ。のちありけり。

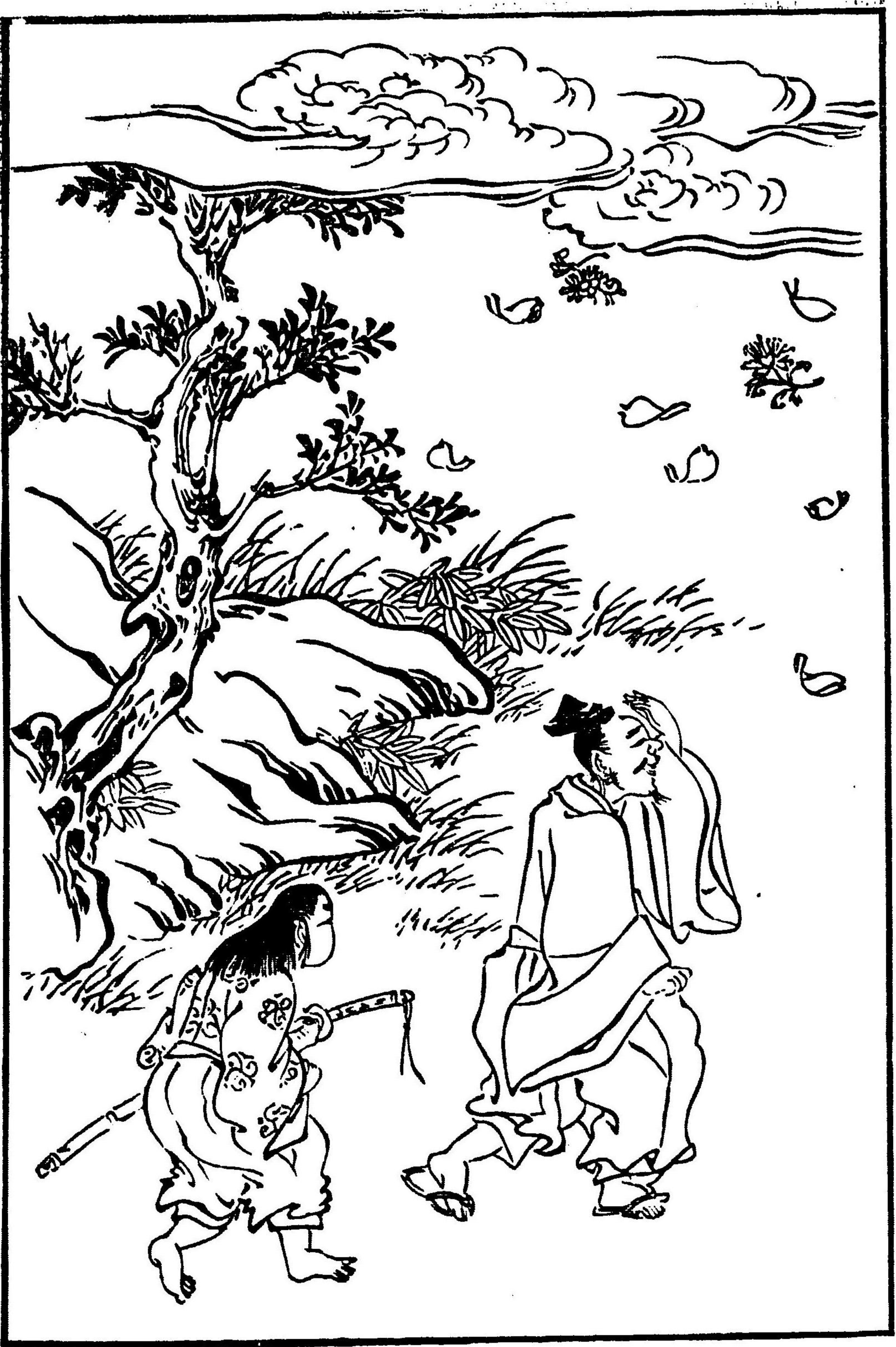
後嵯峨ごさざ天皇てんかうの御時おんとき彌舍かまくらの副元帥ふくげんすい武蔵守むさしのくみ平朝臣たらのあそん
經時きよとき頼嗣頼嗣公公。身みハ武門ぶもんありて國政こくせいに隙ひまあり
やいへん。師しに歸依きえ淡あまのらび時ときく館たかに請せうて
淨教じやうきやうを聽聞てうもんせしは。師しまじ誠実せうじつを盡つくし。西方さいほう
の行業ぎやうごう口稱くつせうの一法いつぽうを勅示くせんせしき。たるにぞ。まじ
まじ崇信かうしんを誦ぶつくし。法ほふひり師しよりて。宗しゆの
傳法でんぽうをらびり。圖頓とん菩薩ぼさつ戒かいをうけらまじ。ら。
かくて師しを信敬しんけうのあまじ。依介いけ谷やに一字いちじを建たてて。

蓮花寺と名づけ。昨の住房とせしむる。時、寛元元年癸卯五月三日なり。我宗の諸典、昨を以て。佐介と稱す。蓮花寺と稱するハこの由なり。









經時生存の時ちりけるある日念佛とて睡眠せし
 きつら後一蓮花寺より光明をもちてさるる赫
 奕なることや。白日のごやう。見るぐらうせらに廣
 く。あまのく日本六十餘州を照しぬと見る。
 さかそこのら猶その光明あるがぶとたうとらし
 あり。奇異のあはじをもちます。一昨を信し
 尊重せしきつら。はまば震且西都乃本寺り
 例一。經時感あは光明にもし。寺号を光明と

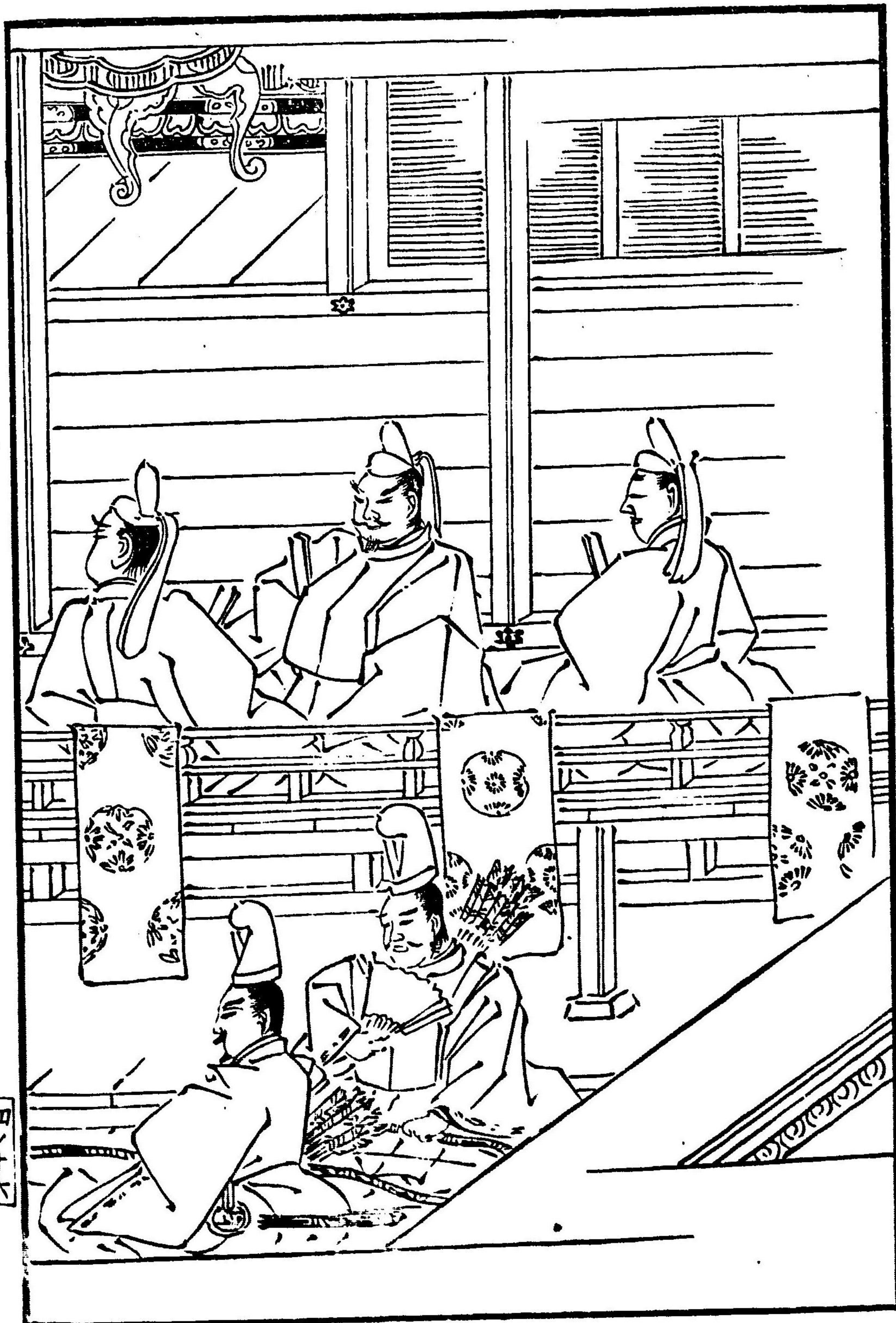
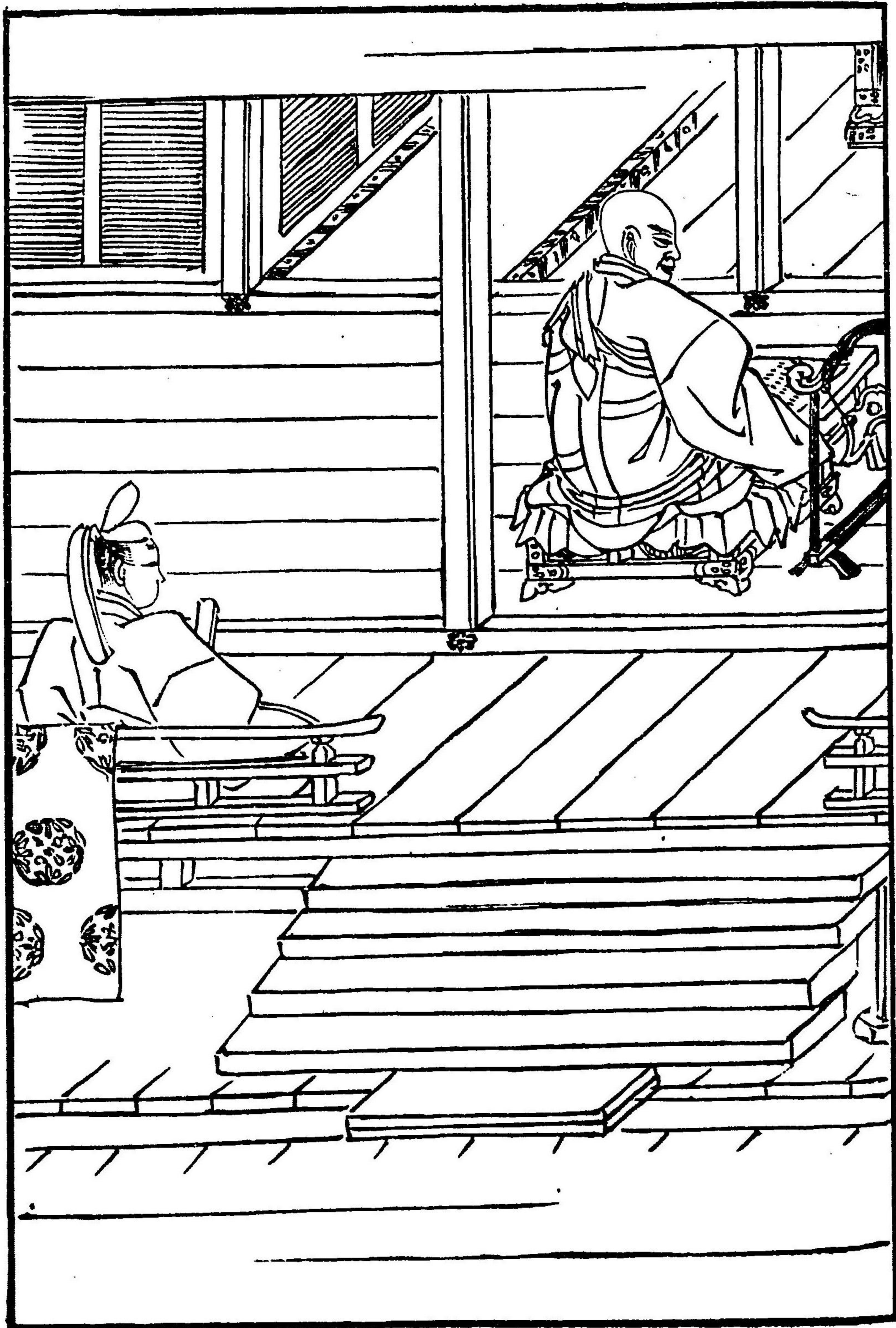
あしめ地を天照山の麓善導塚のふもとに
移さむやちかひきけるふ不図病にうつらまふ。起
まもむきをかり。そのこゝを舎弟の時頼に託し
ま。遊去きしむらる。相摸守時頼朝臣。号最兄乃
らる。ばらむをつぎて大に修飾をくはへらき道
天照山の麓。ひきうつさきて。題額をあくる。あ
前名をのこす。天照山蓮華院光明寺とらる。
名づけらまはる。時ハこれ建長年中ありた。

後深草天皇寶治二年申歲師五十歳淨意法
尼往生の旨すえし。ば師歎息志そ人衆不
定ハ今始て敬ぶまにあり。然中も化夜の
ひまをたよらる。帰洛の契約を達し。こ
そのえ。送儀をらる。即ち上洛。あが
こもる。浄土三部の經義吉水正流の要旨
宣暢。菩薩一乘乃大戒を弘通せらる。
了。道俗群集。貴賤競聚して。あまを

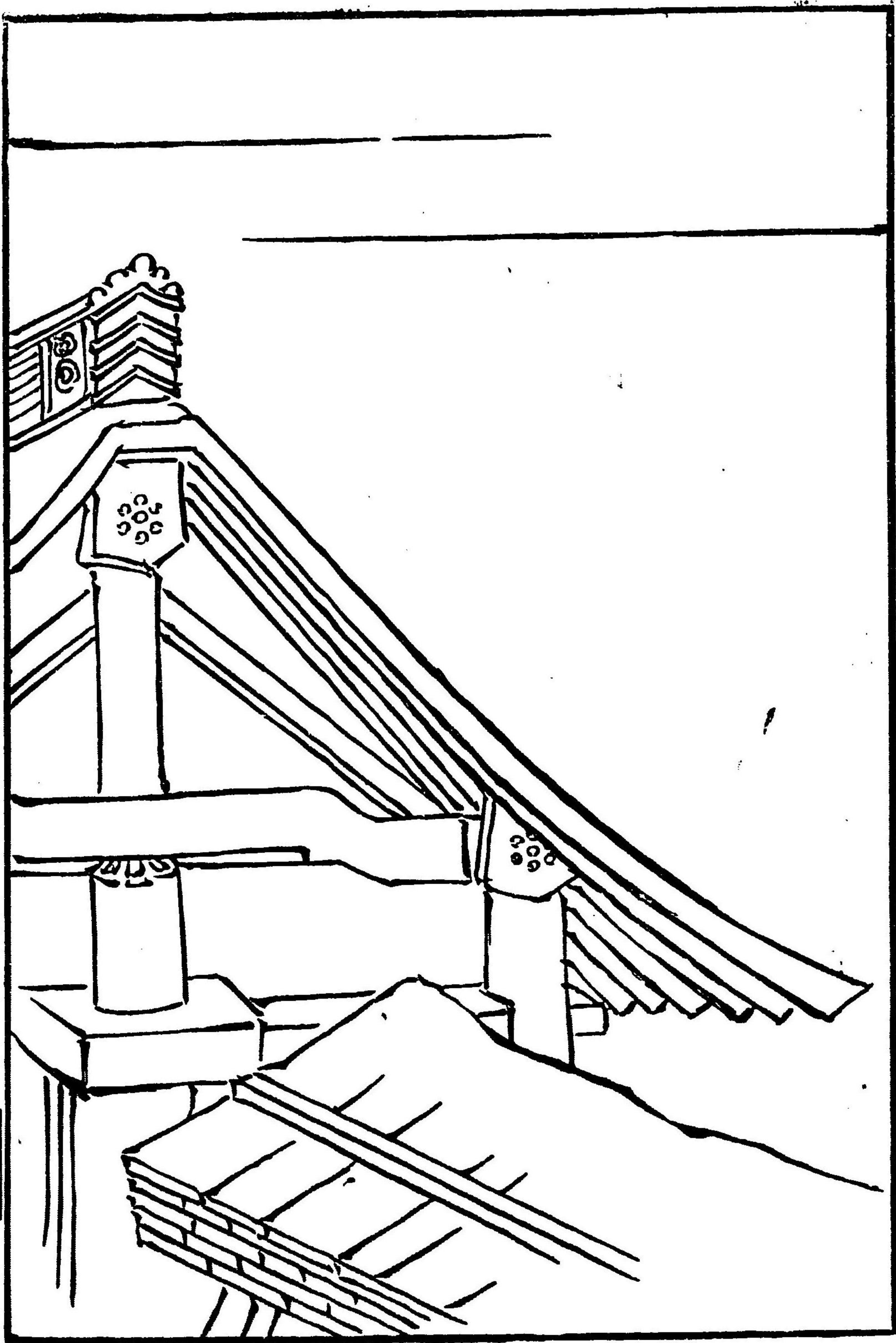
きつちをきをうけり。化導に随はずといふこと
外。美流を捨る。正流に歸る者なり。また
あふかきなり。

同年後嵯峨上皇降乃德をたきり。仙
洞に請ぎられり。淨土三部の妙典を講せし
免菩薩の大戒を稟受まじく。叡信ことに
深りけり。此時香袍をたまひ上人の勅號を

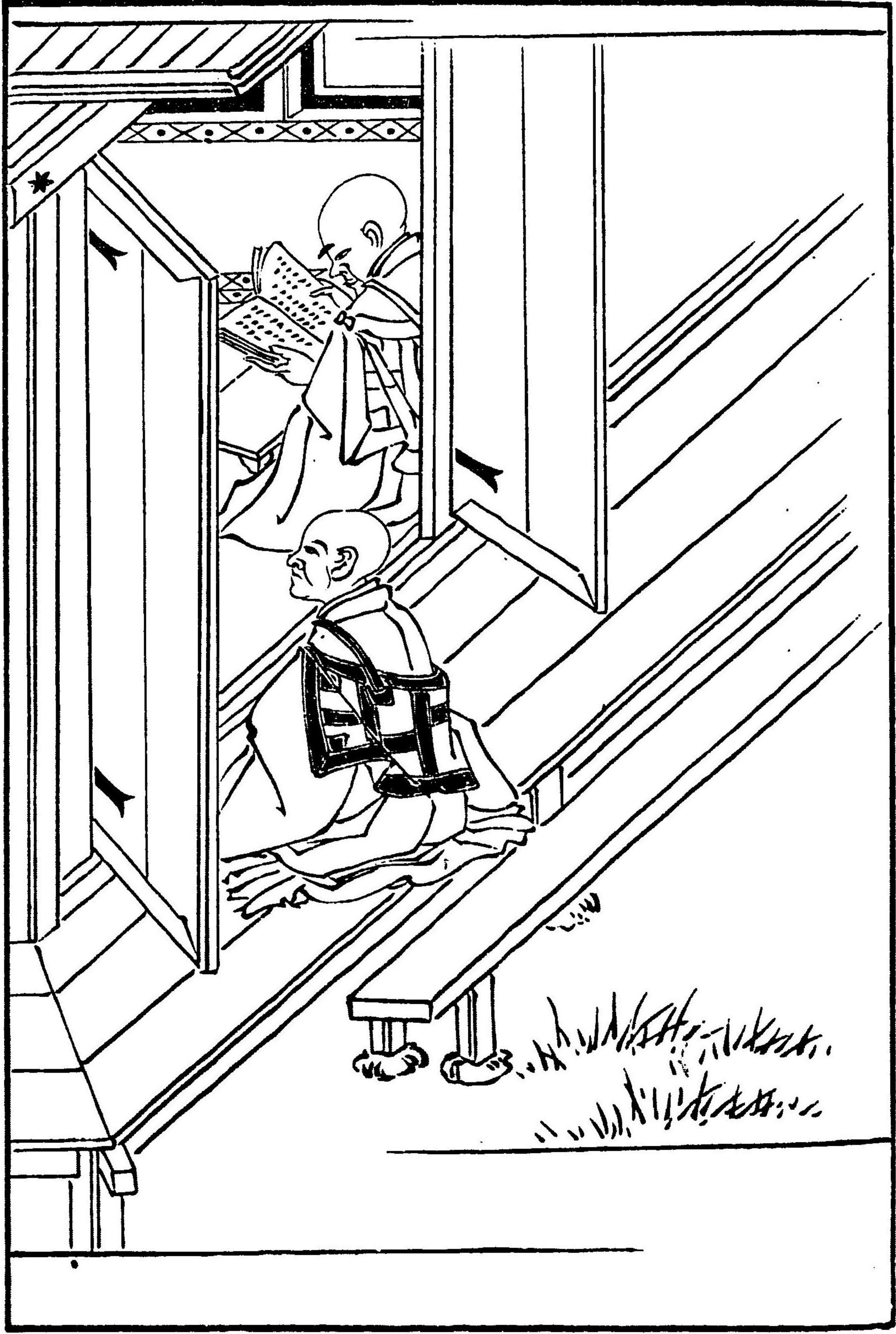
賜りりける。曩時 後白河法皇仙洞に。吉水
大師を勅請ありて。往生要集を叡聞まじく。
菩薩の大戒をうけさせ給ひ。くらたあも思ひ
出らきなり。いかにきくぞありける。

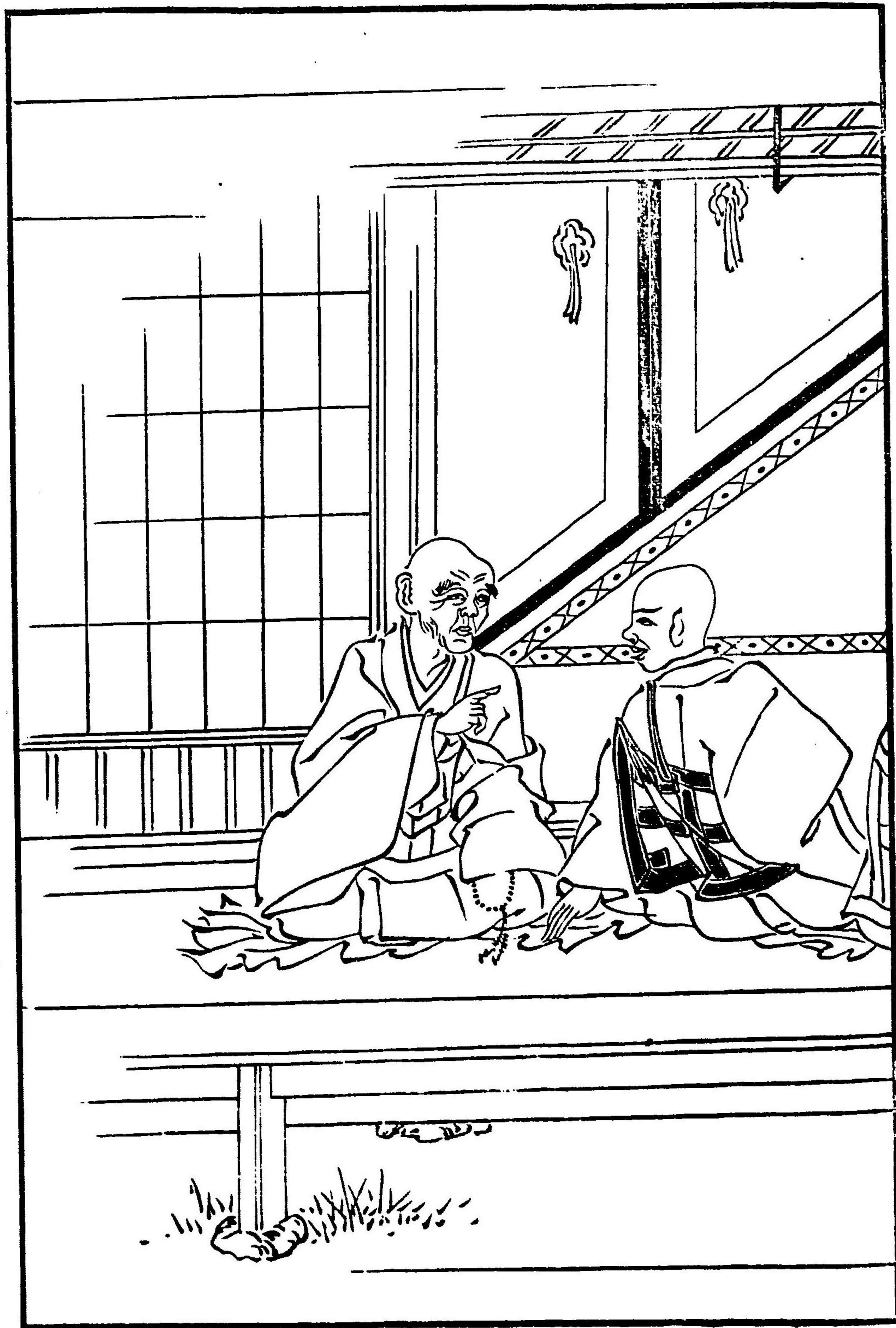


降。ある時。洛東清水赤筑地に。蓮寂房と共に。
 四十八日の談義あり。に。降をよこし。に。
 両流を校合せし。まけり。この蓮寂上人ハ勢親
 房の弟。吉水大師の孫弟あり。おのく降承
 の旨をり。浄土の宗義を檢討せし。まけり。
 宣述。まら。ご。い。る。荷節を合せし。まけり。遠く
 ねんありける。蓮寂房のいをもく。故勢親房。常に
 中。ま。ハ。筑紫の。光。ハ。よく。故上人乃。浄義



を傳つた持もちきく。正ただ旨ちみを乱みだらぶ。まじまじの門かど徒とと精せい西さい
 の義ぎにままじまじま。別べつ流りゅうをままじまじまと云い。今いま述ゆ
 る處ところを校けう合がうするに其その言ことば虚こ妄まうああららずずけりこと。
 お互あひたがひには善ぜんの涙なみだを流ながすまかりかり。かかの勢せい親せう上人じやうじんと
 大師だいしは常じやう隨ずい首しゆ尾び十八年じゅうはちねん。口くち授じゆの法ほう門もん早はやありと
 聖せいなる其その門もん人にんにまじまじま。かかくかががかりには善ぜん
 ありしハ。實じつに吉きち水すいの汚け瓶びん年ねんを纏まとふま混こん濁たくをまじまじまるる
 證しやうありとままじまじま。世よはたたままじまじまとと。
 四十八

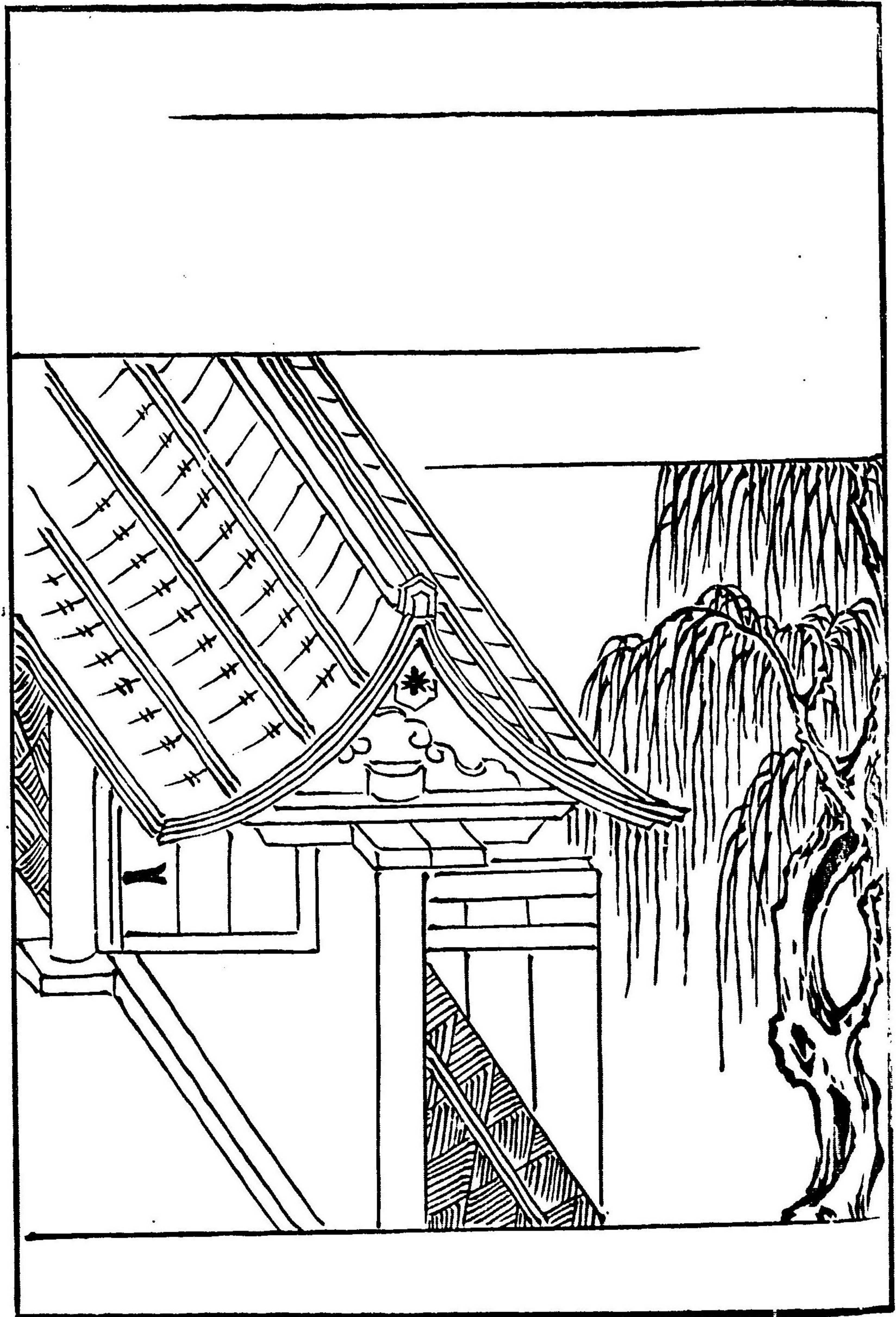




建長元年己酉年六月。鎌倉にありて光明寺に住せられ。
自行化他。修徳むすべし。門弟寂惠。親等。あめ
師をたすけ。浄教を弘通。一々。門人。一々
あふく。信徒。いよく。群集。一々。
同二年。庚戌年。二月。和語をのり。浄土大意。抄。一巻を
撰述。一々。まよ。遐く。未俗の。婦女子。に。い。る。ま。ぞ。
後。之。中。の。一。々。志。め。む。一。々。な。る。べ。し。

同六年甲午年八月上旬。師五十六歳。下総國。瀧本。り
あ。り。て。遠く。将来を。登。百世。遐代の。徒の。易行。二
お。も。む。く。一。一。実。途。の。一。一。志。め。ん。一。一。め。に。始。め。て
一。一。志。め。ん。一。一。を。一。一。て。選。擇。傳。弘。決。疑。抄。を。草。篇。一。一。結
ひ。つ。り。本。宗。の。口。傳。大。旨。は。中。に。載。せ。し。る。

師瀧本の光明寺にいま。て。有人の。請。により。あ。
放生。慈濟。を。修。せ。し。ま。け。り。師。鯉。魚。の。教。上。り。



朱字梵書にて。放ちたまふりて。今ちふにせ池乃
 鯉魚額より朱點あり後人々を渾名しと。
 記主鯉と称すといふ。



目八廿

同年十月上旬。江禅門の認請に應じく。浄土三
心私記一卷を撰述し。増らまけり。いまちり。
道俗の階梯本宗の亀鏡なり。

記主禪師行狀繪詞傳

吉水玄信著

五六

東 京 圖 書 館				
三	一 八 二	六	三	
冊	号	架	函	類

明治十八年十二月七日内務省贈付



記生禅師行狀繪詞傳卷五

二丁巳年正月十七日師下總福岡の竹庵

一終ひける時上総周東今の周の在阿弥院

佛庵室一尋詣して手に手印乃疑問を

敬告曰小口傳の決答を請り師五十八九

歳の終一逼りて目暗く手ふるひ給へども

東阿志を感ずるま利生のあがきるを思ひ

こづつと餘寒の風を凌ぎ顔齡の基を走らし

先聞の趣を載せし後案の疑問一巻へた
まふ日數三旬を経て一部西巻を成し決答
授手印疑問鈔と銘し終ふ。すたまたま在
阿一授與し終ふ。年來の疑雲悉く散
て残さく大少熟甚しん行俱し決して有り
ぬ斯書ハ國師授手印の口決を載せしる寔
ふこそ蓮門の秘願心行の樞鍵直至道場の捷
徑退代行者此珍寶なるをや。

正嘉二年戊午九月和語をりて浄土宗行者用意
問答一卷をつづりて。退代の凡愚を誘導し
まふ此書ハ十六箇条をりしめて。浄土宗安
心起行の旨を記さしめし。まふしり。乃
婆心りて。婦女子の輩まです知し易く。
ん行とふ。は。まふし。み。給へるなま。バ。
西方の行者ハ常にこの書し讀く。憶持すべ
き要書なり。

平常に法談ありけるをりくには法にて作ら
まはる法詞くなくかたはさるる因果を信
ぎるもの他かた信弱く本教を信ぎるのみ。
因果のことありし奠くはめす本教を
信し兼く因果を信ぎよまらるる佛意
を信ぎしは信ぎを信ぎしなり。又いさくは
しるるをりくをりくにて本教を信ぎまはる
信ぎまはるは信ぎまはるなり。三つとくはなり。

又いさく。先師阿辯の仰いさ。故上人宣ひさ。
信ぎまはるは信ぎまはる。念佛を中時々の念佛乃
行はる大要なりと告ぐて行ぎるにつま
て。勇あつて業にまはると欲するもの。家身す
て三つを信ぎまはる。たつとくは信ぎまはる。
又いさく。三つを信ぎまはる。たつとくは信ぎまはる。
住すまはるは信ぎまはる。たつとくは信ぎまはる。
を信ぎまはる。たつとくは信ぎまはる。

又いとく別時までいなくせ。六時禮讃
次の念佛んまよむ時など。別し用心
見佛のおもひ住まへし。
又いとく先師口傳さうらひし。念佛んを
か住まするふさうと。いふことをまゝして。其詞を
ゆるし時三心を一時不具するまじ。
又いとく。予輩に念んまへく。沙門の形を
ほく。いふ。さき幸あるに。似なきまよむ。この

間邪命のまがく。此因果の苦をいひせむ。但善
提んを發して。彼の罪業を消さんには。然るし
上求下化を。こそ發し。辨し。といへども。教往生
心。善提んは。當まじ。此故し。信施の確報を恐
まむ。の巧し。教往生んを發すべし。
又いとく。先師上人。談義の最中に。目
の時來まる。といふ。一文一句を誦志。おきて。やがて
阿彌陀經を始め。禮讃念佛を行はせし。

しんぎとありつ。武に弓矢をもちて正しく文に政道を
もて正しく農に耕作するを正しく商に貿易す
るを正とす。かく佛の經も亦然り業障も
衆病悉除をもて正しく地藏に無佛度生を正
しく般若經も畢竟空寂を正しく法華經も二
乘成佛実相一乘を正とす。然して或ハ七難を滅
し七福を生じ又ハ生天の樂を受し人界の苦を
拔たまふハ皆是傍なり阿彌陀佛にも又傍正あり

往生極樂をもて正しく横病横死横難を除くる
こまは是傍なり。叔三部經の中に起立塔像讀
誦大乘孝養持戒等ハ。是傍なり。彌陀
正意ハ。唯是称名念佛をもて本願と決るる也。
此念佛もて往生せんハ阿彌陀佛の正意
順ずるなりと。先師を仰らまひしき。
又曰先師示く日所作の念佛を欠
らむる申入る。日所作を申入ざるハ懈怠

にちるる因縁あり。ちるるべ申入らるる佛をまかり
たてまつる外ありべしと云ふ事。かの法隆寺終るやうを
承るに嘉禎四年閏二月廿九日未の時なり。然るに
同月廿七日。仰らるるらるる。毎日六萬の法念佛を命
終の日まで。一日も怠るべし。心のはげしく佛に
誓ひし事なれば。誓言に違はざらむと云ふ。弱しむらむ時
の料。三六萬遍を申たりと仰らるるらるる。
念佛の行者の法行実を仰きて。龜鑑とすべし

のり

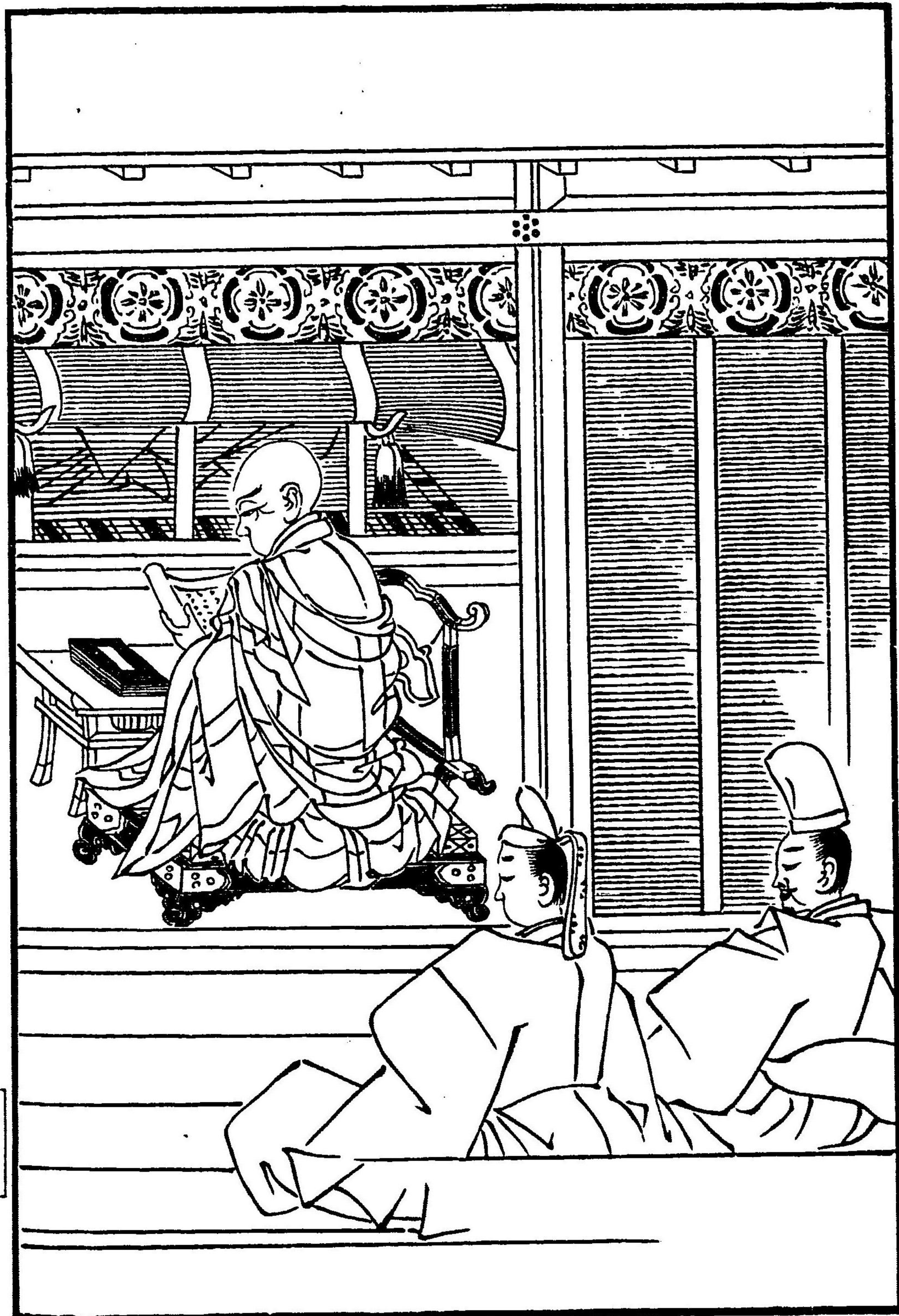
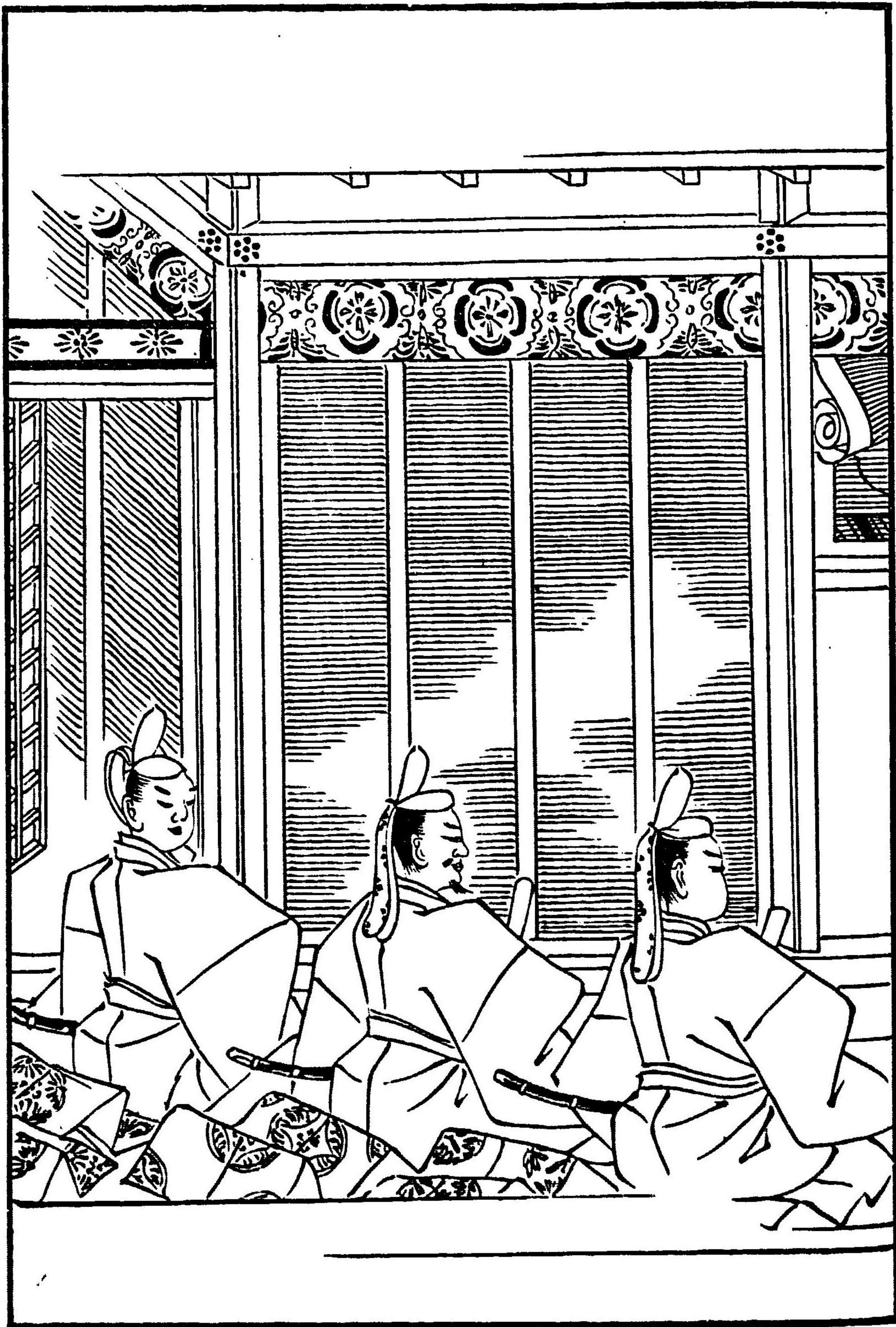
文永六己年。師享齡七十一歳。淨土宗の安ん
起行小おつ。門弟等が師の筑紫に相傳し
給へる。別小深奥の義あり。一たむ。疑ひおふ様
もあつ。む。末派の門弟。緇素の異轍あり。む
為。起證の誓詞を述べて。後小安心決定集
了載あり。せ。文。一。い。さ。く。

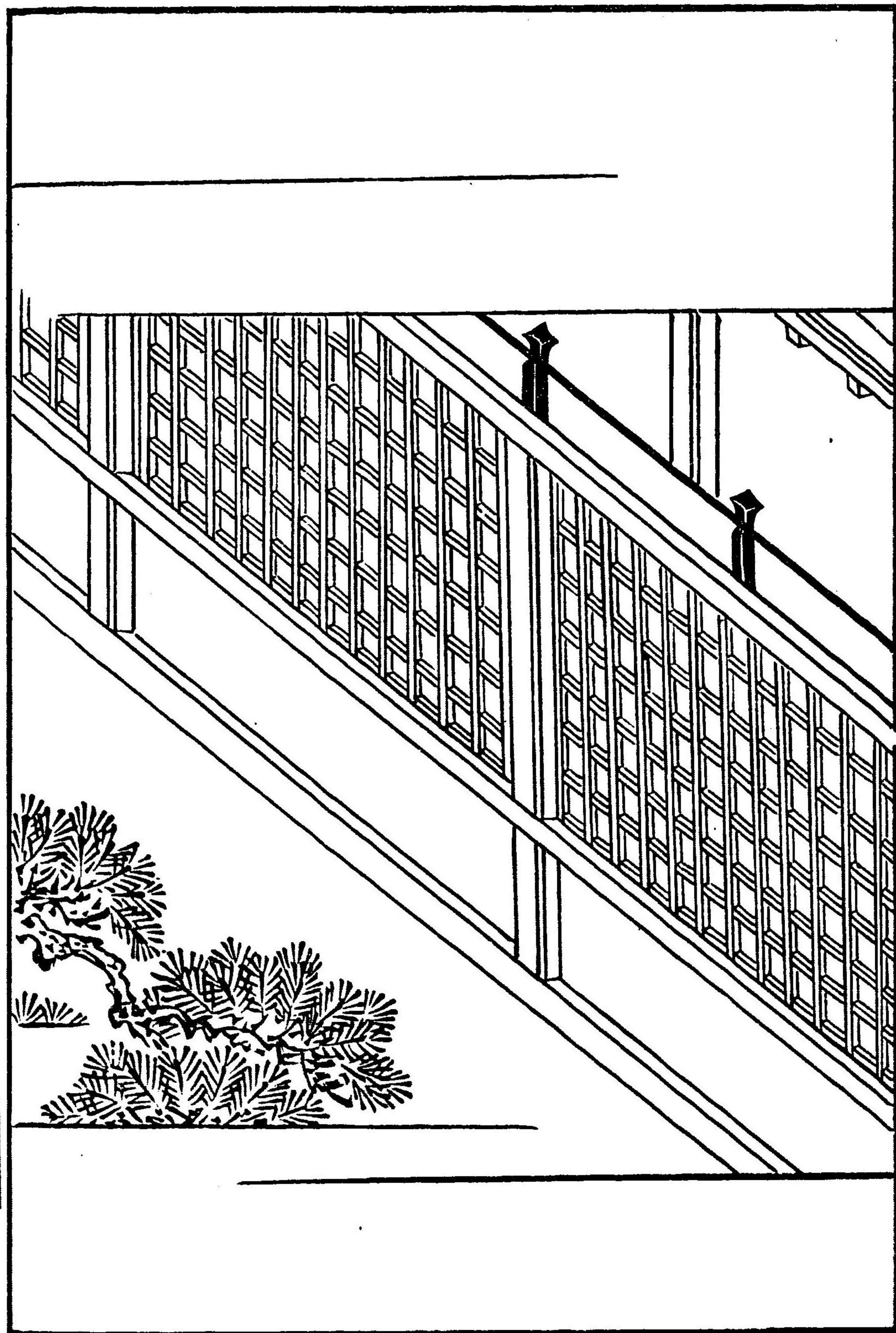
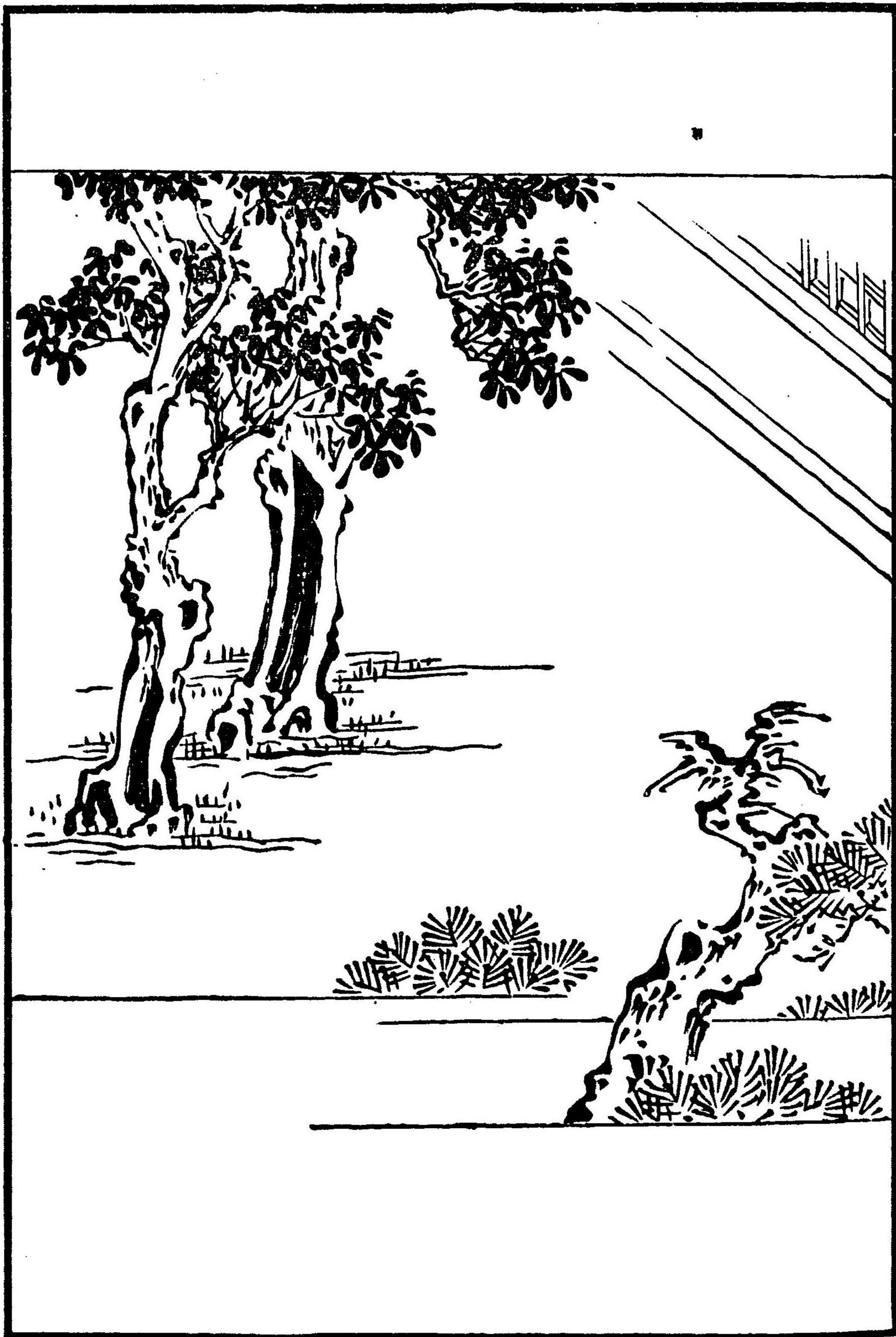
後宗だのえん多天皇たのえん御宗ぎよすう建治二丙けんぢう子年九月しご。まゝまゝ花洛はならくふ
 のほりて。化導けだうありくも。衆人しゆじん群ぐんを志して淨じやうとす
 要津ようしんを問とふ。両方りやうほうの去行きこを尋もとむ。の踵くびすをつゞく。
 じきこをきつゞく。せはらのもあることや。前時ぜんじは倍ばいなり。
 主上しゆじやう後ご宇多帝うたてい師しを宮中きやうちゆうに請まをして。淨じやうとの宗要しゆようとまひ
 ナない。まゝまゝ大乘だいじやう菩薩ぼさつの圓頓えんどん戒けいをうけぬま。
 なる。叡信えいしんを表あらわす。まゝまゝはく。紫袍むらさきを賜たまふ。とぬ
 種くさぐさく。此こゝ法ほう具ぐをたまひ。く。我宗わししゆよ。此こゝ衣いのある

五ノ十

はらへり。

)





それ圓頓菩薩の一乘戒は。南岳天台靈山視聽乃
相承り。かゝりて。叡山の傳教大師。此を師資相傳し
て。黒谷の叡空上人。乃至きり。上人ある法をまゝ
びたまひ。なるに。一夕。天台大師の夢告によりて。終よ。
我が吉水大師は傳へらき。しり。志のせり。あり。我宗
相傳の正脈とちりて。印璽の支證とける。南岳九条
の袈裟。妙樂の十二門戒儀。皆を我宗より傳へ
きり。此ゆゑ。吉水大師。これを鎮西の國師

と授らむ。國師。まゝ。瀉瓶。此法器をまゝ。びり。師
と授與。きり。法師。まゝ。ナリ。其を。白旗の寂慧上
人。と傳戒。給ふ。ゆゑ。南岳の袈裟。代々。乃
戒牒。これ。つて。今。我が本山。乃。寶庫。と。秘
藏。きり。

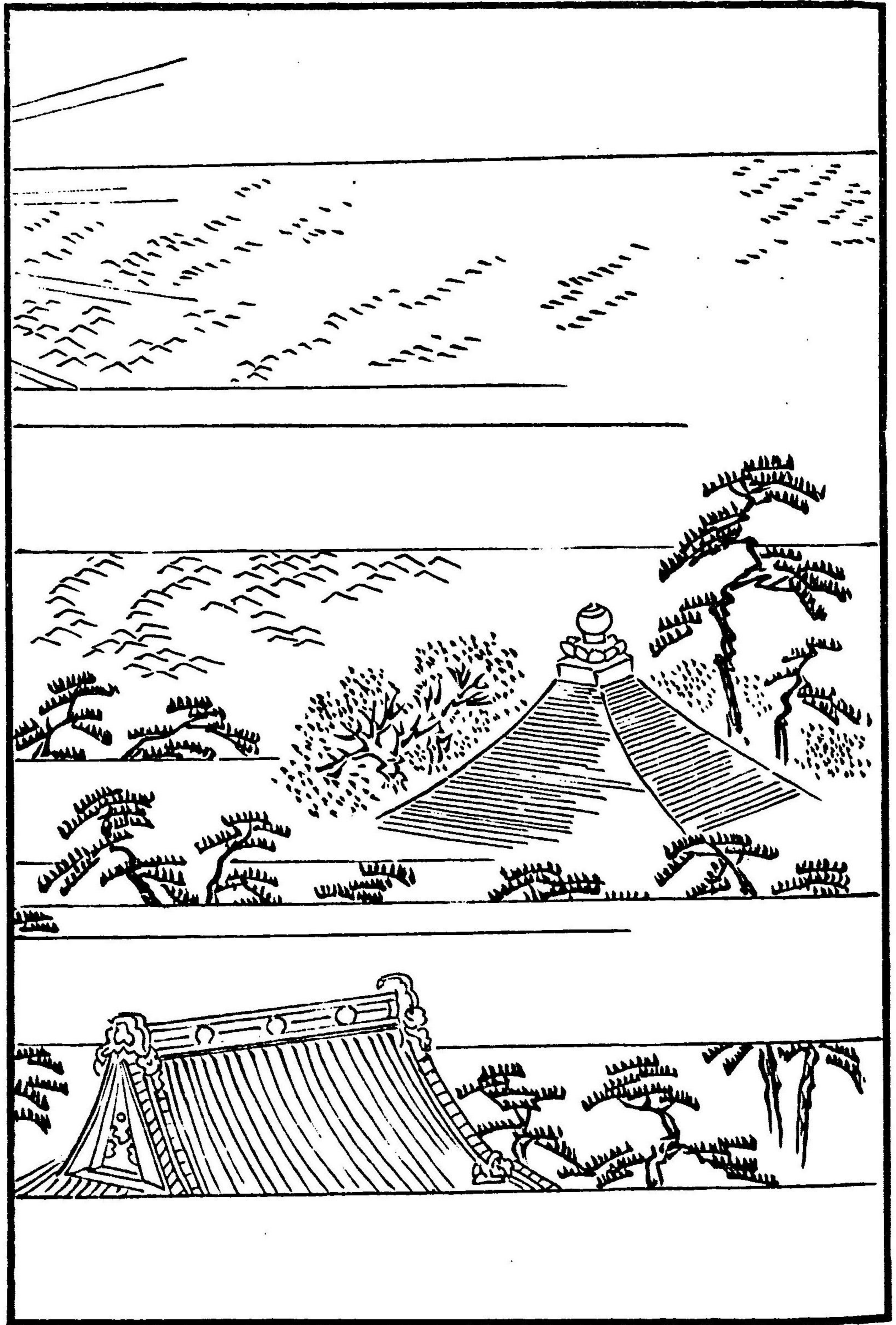
一年。師先師阿辨乃墳墓を拜きんため。鎮西に
至り給ふ。旧時の同侶ありぬらうとみく。
善導寺第二世の繼席とありぬ。善導寺の行化
にいよいよ一所一止住まごき本意あり
ねばぬらう。評きらうとらう。

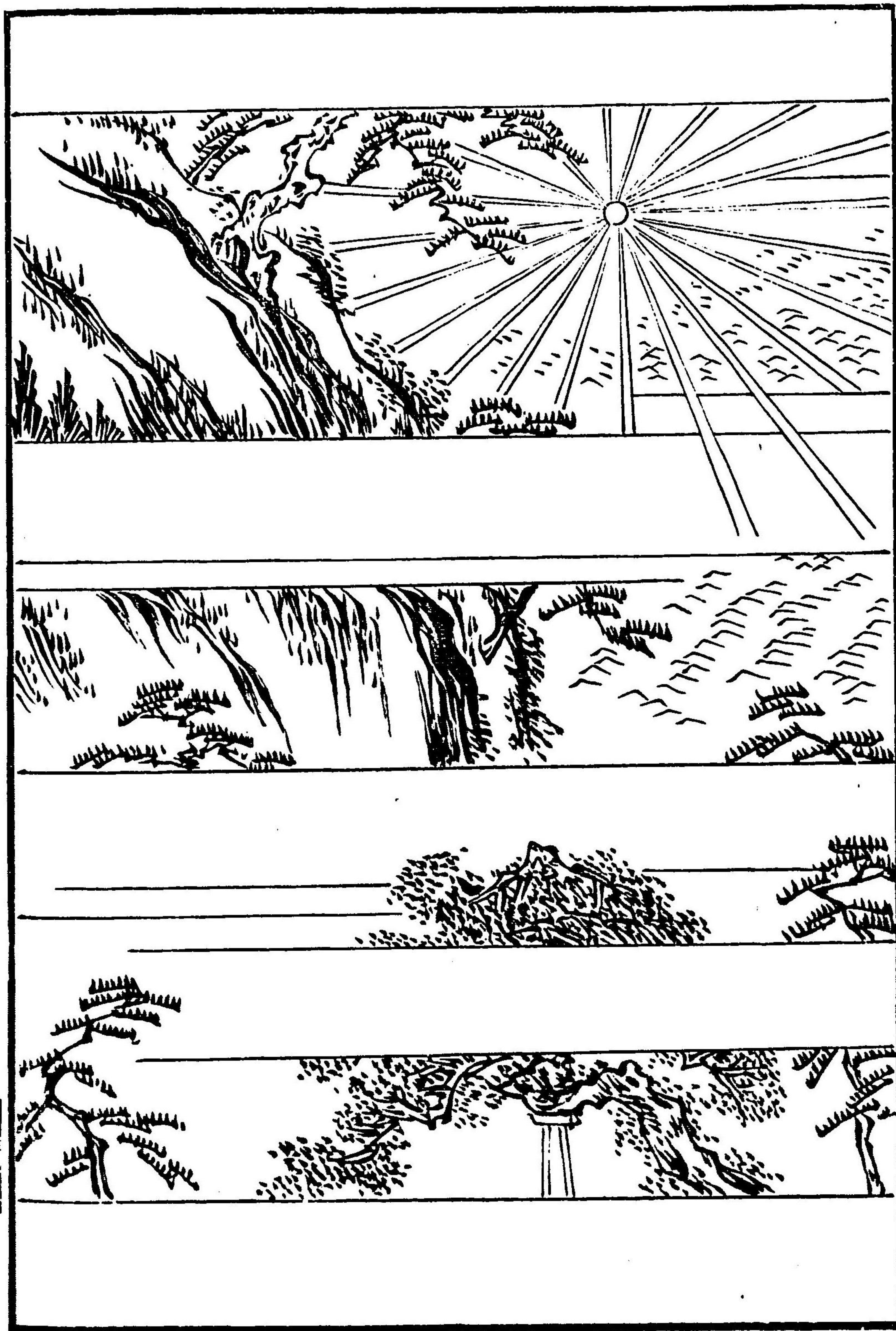
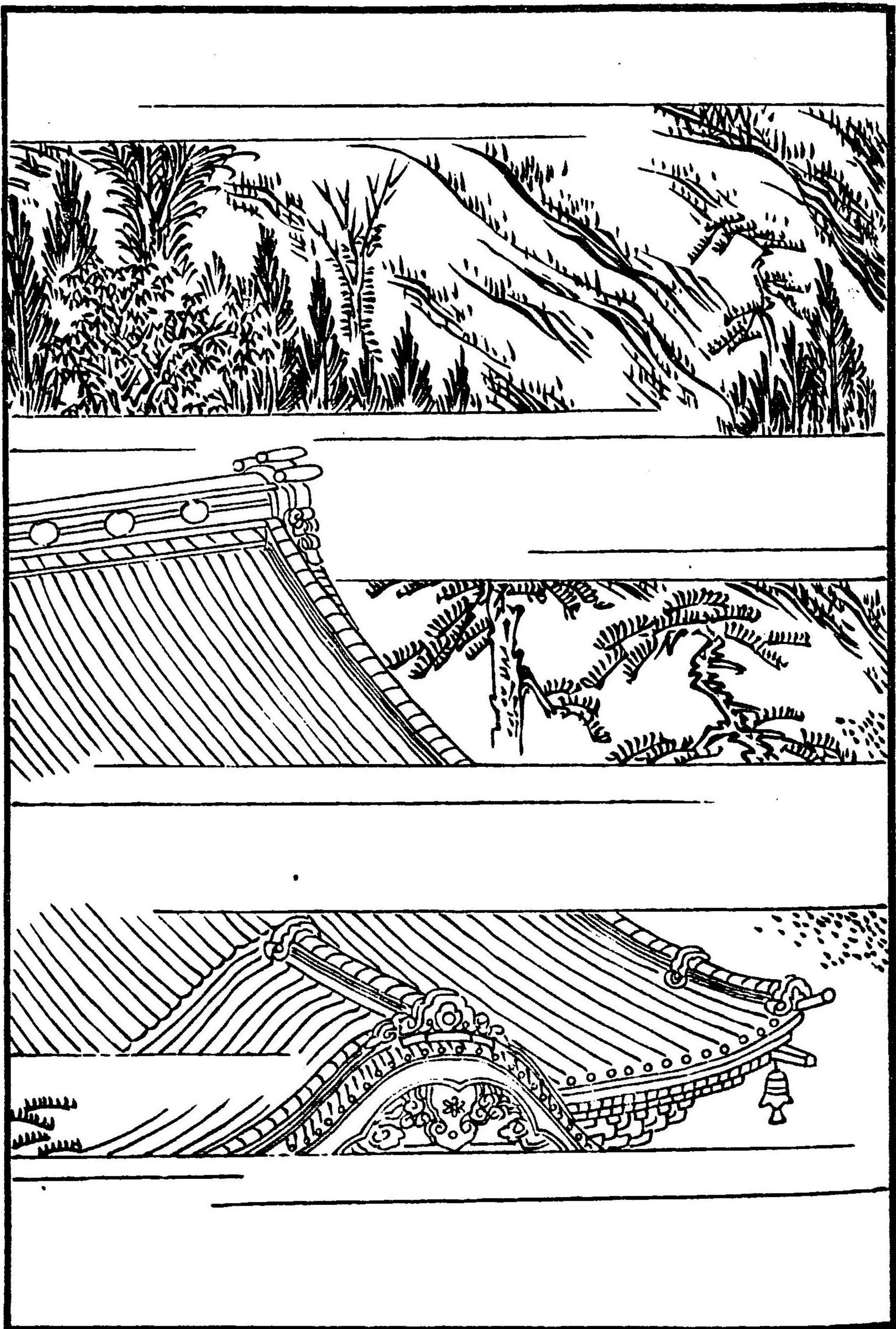
ある時伊豫國久米郡鷹子邑淨土寺に
勅化ありたる。抑みの寺は空也上人行化の古
寺にむす。法西國師の道場とす。念
佛の弘教あり。大師もよびこつて。新像
を遺し給ふ。師も自影をきけり。二祖乃
新像に侍き。免給らぬ。その新像申あり。
今ハ同國松山乃大林寺小遷座あり。

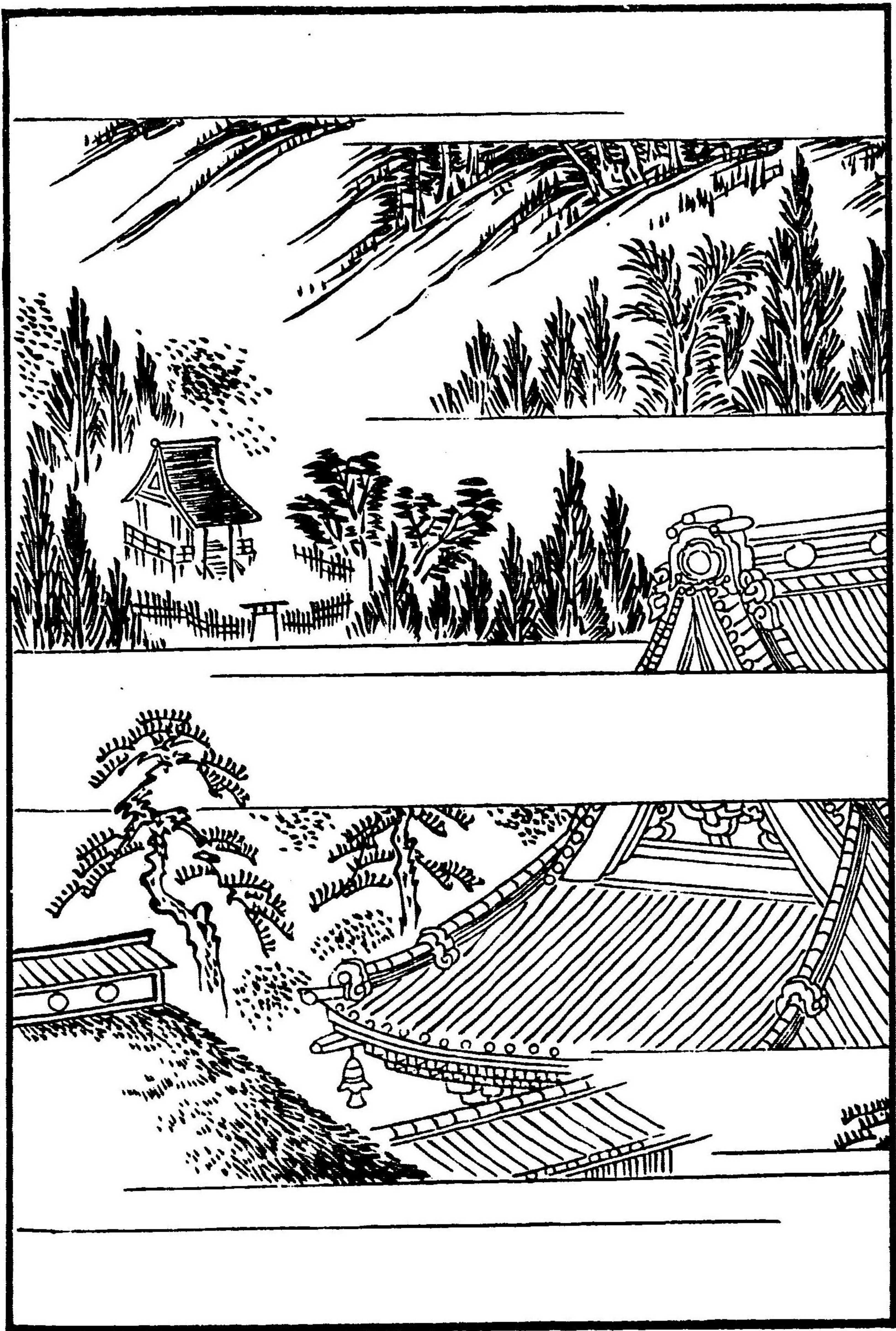
花洛して。もはく。淨教を弘化す。まこと十一
年。貴賤おろく。志門に歸し。受戒し。念佛
を修するもの數を知らず。故に一年に
了。三所まで。精舎を新建せり。きなり。一条法然寺。三條十念寺。
小幡山。高勝寺。これあり。化導せり。かまなき。此を以て。初るべ
きたり。遂に。弘安九年十月十六日。帝都を出て
福倉に歸らる。

師すべし。東關の處に交る。二十九。年。花
洛に雲に入ること。前後十二年。其餘。法國を
行化せり。志と。十余年なり。歸入淨教の
已後五十餘年。其間淨教を開示し。要法を
弘宣し。給ふこと一日もたわらざり。然して。嘉
禎のむしより。終焉に時。あまのままで。日別
六卷に。稱名六卷の阿彌陀經。六時に禮讚を
修する。一日をかきたまふ。あまのままで。月々に

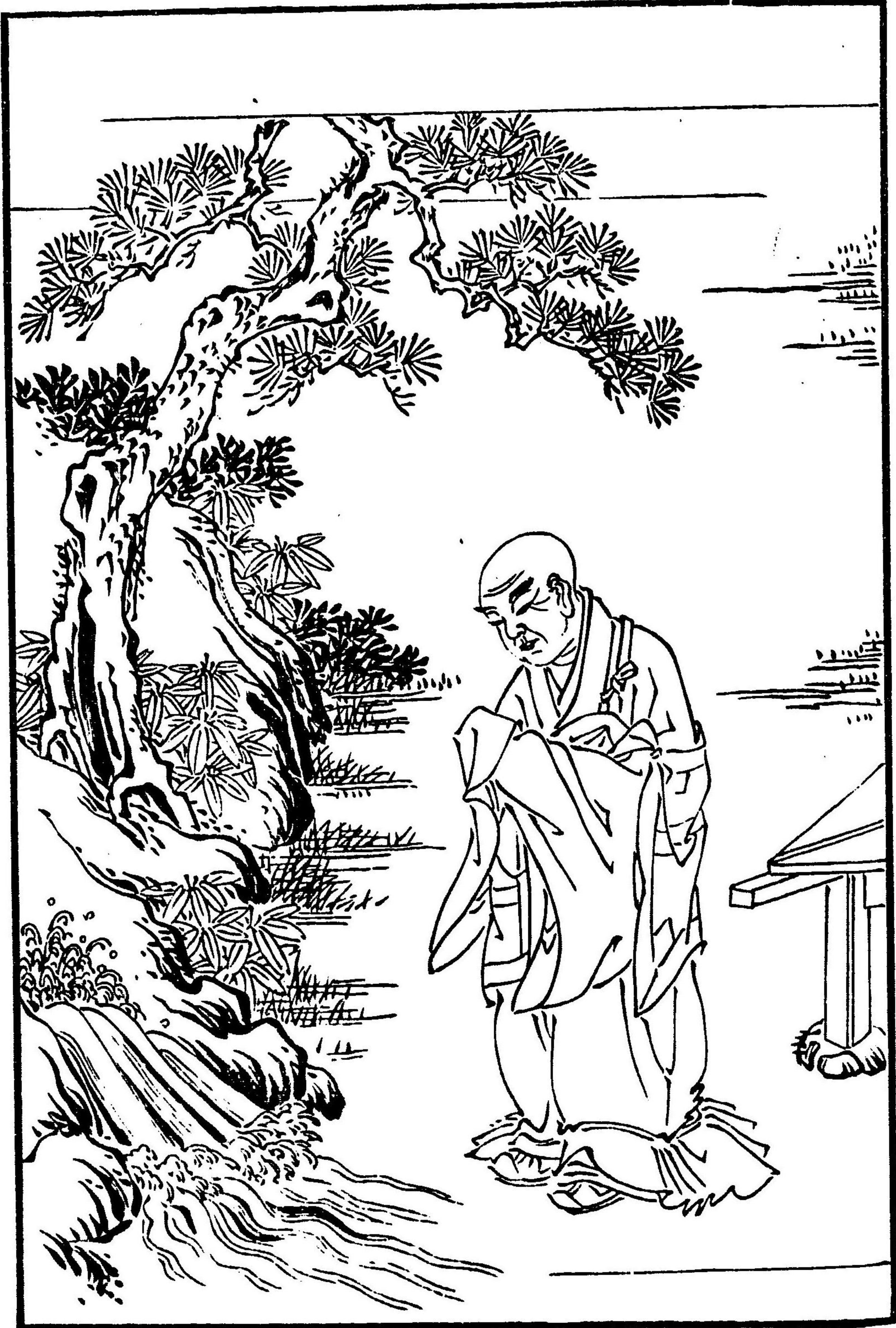
法事讚時に三部經節に別時念佛其事
 なる実あり。是れ欣求浄土の爲なり。り。
 又、所へ行化をり。或檀信の請り寄
 り。又ハ改化乃蹤をり。精舎を創建す。ま
 ら。又ハ改化乃蹤をり。其仲。彌倉に光明寺ハ久
 住化導に處終焉遺蹤乃地に。今に在り。
 ようく龍神獻燈の奇特あり。







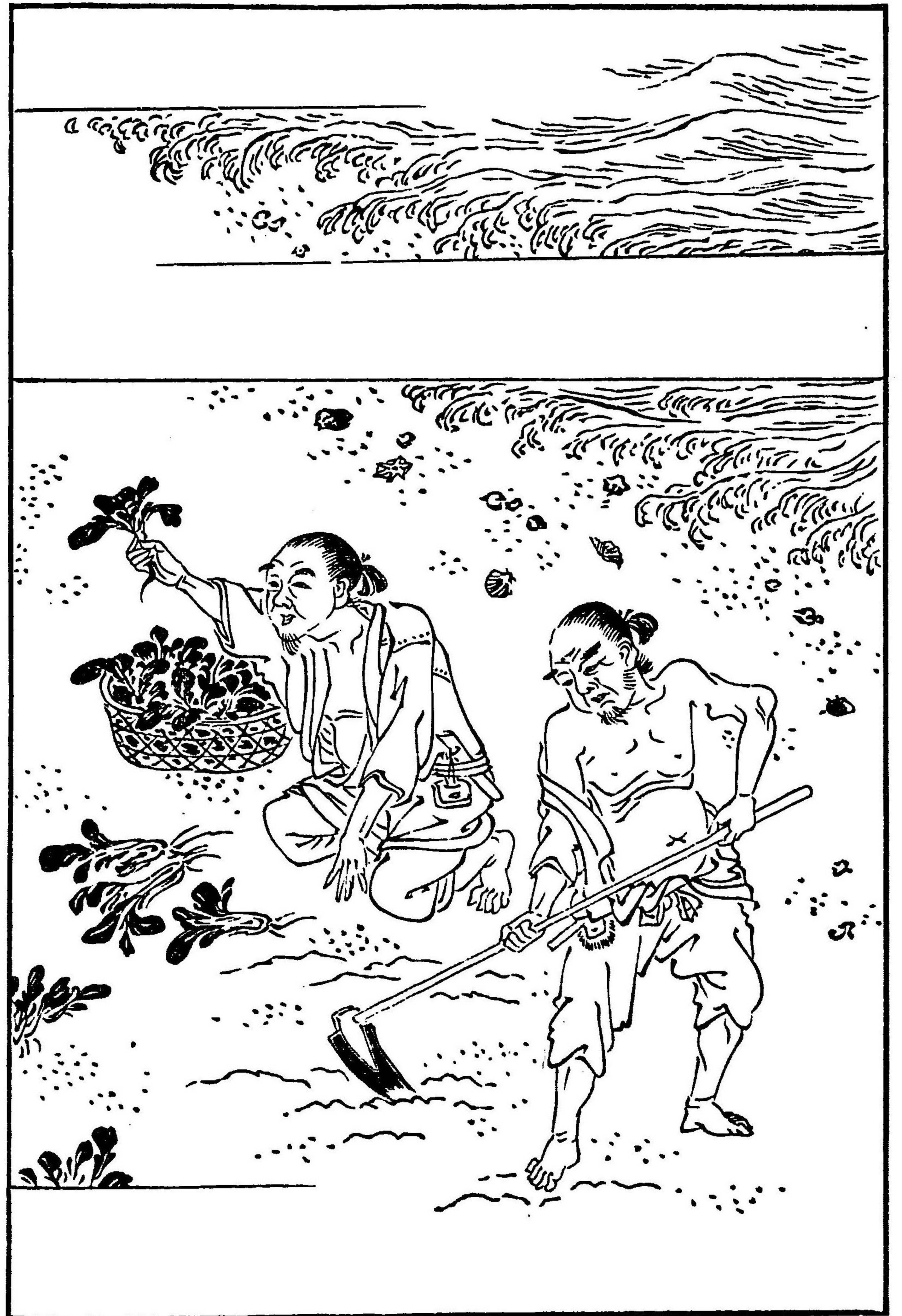
師ある時寫經せむと志たまふよ。寺境法水を乞ふ
 あり。庭よりわたりて龍神に祈求せり。今
 に忽然と岩下に清淨水を涌出せり。猶今
 存して記主水と名づく。いのちを炎旱に
 色涸るゝ事となり。是を結びて請雨此法を修
 へ。まゝ眼疾を洗ふ。かあり。其驗あり。



師の侍僕。白井素といへるありたり。石見の
國より尾逐して。諸州に隨從し。終に彌念
し。止住せり。孫裔相續し。今も在り。現在
是ともある。師に慈愛あつたに。よきふち
む。

師。ある。奴僕を。門前由比濱邊。波多
菜をつら。僧衆に。餐餐とせり。

師。寂後。種殖の勞を。なま。せり。と。い。は。し。と。
も。種。子。の。う。ま。り。の。う。ま。り。と。い。は。し。と。
名。づ。け。記。主。菜。と。い。は。し。と。い。は。し。と。
小。坪。邸。に。海。邊。と。い。は。し。と。い。は。し。と。



師。生涯。彌陀の三尊を造りたまふ。四十八
躰於中。立像の一躰。今も存。鎌倉此本山に
安置す。相好儼然なり。古來別稱す。記
主佛といひつる。

あ。西方の變相を圖す。三十幀。浄土乃
三部經典。其外。大乘菩薩圓頓戒本。九帖疏。
宗祖傳記等。書寫したまふ。若干あり。これ
諸の淨刹よをまゝとて。功德藏とさしめぬ。

記主禪師行狀繪詞傳卷六

弘安十丁亥年。師の生存。忍ぶる縁や。重きなり
らむ。六月十六日より。痢疾の患あり。ひんきら
不食より。下痢頻ちなり。やいへば。敢て苦
痛ある氣をなす。

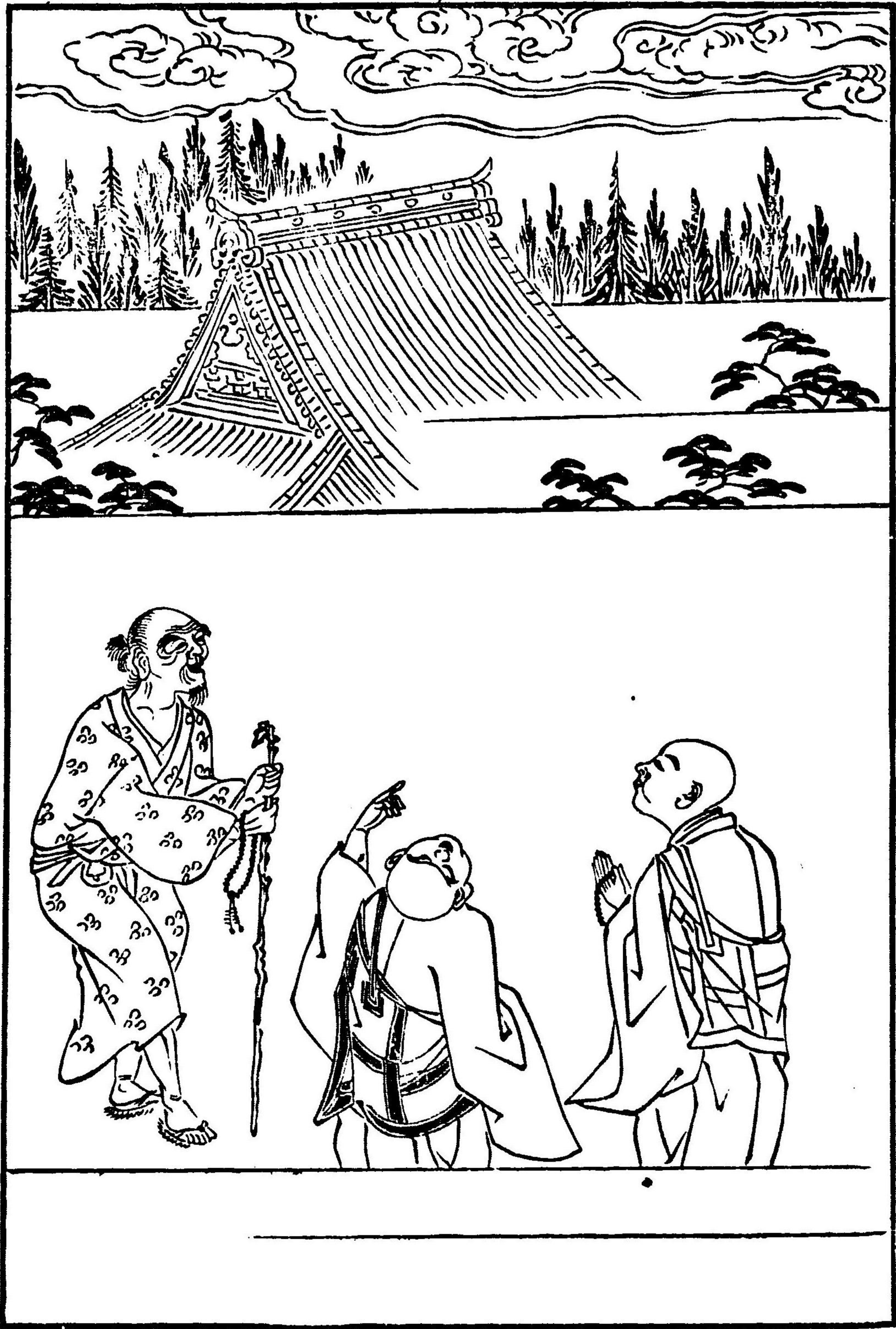
同廿二日より。赤痢を減じ。不食の老
躰日小増して。衰弱志給へり。されど。始より。
手に念珠を。口より。名号と稱し。終る。

平日ひんじつも受うちりくりく門もん弟てい道どう證せう問もんていていくく此こ
度た御ご住じゆ生せい決けつ定ていよますす一いおおままささやや師し亦また也や
とと答こたへ給たまふふ。

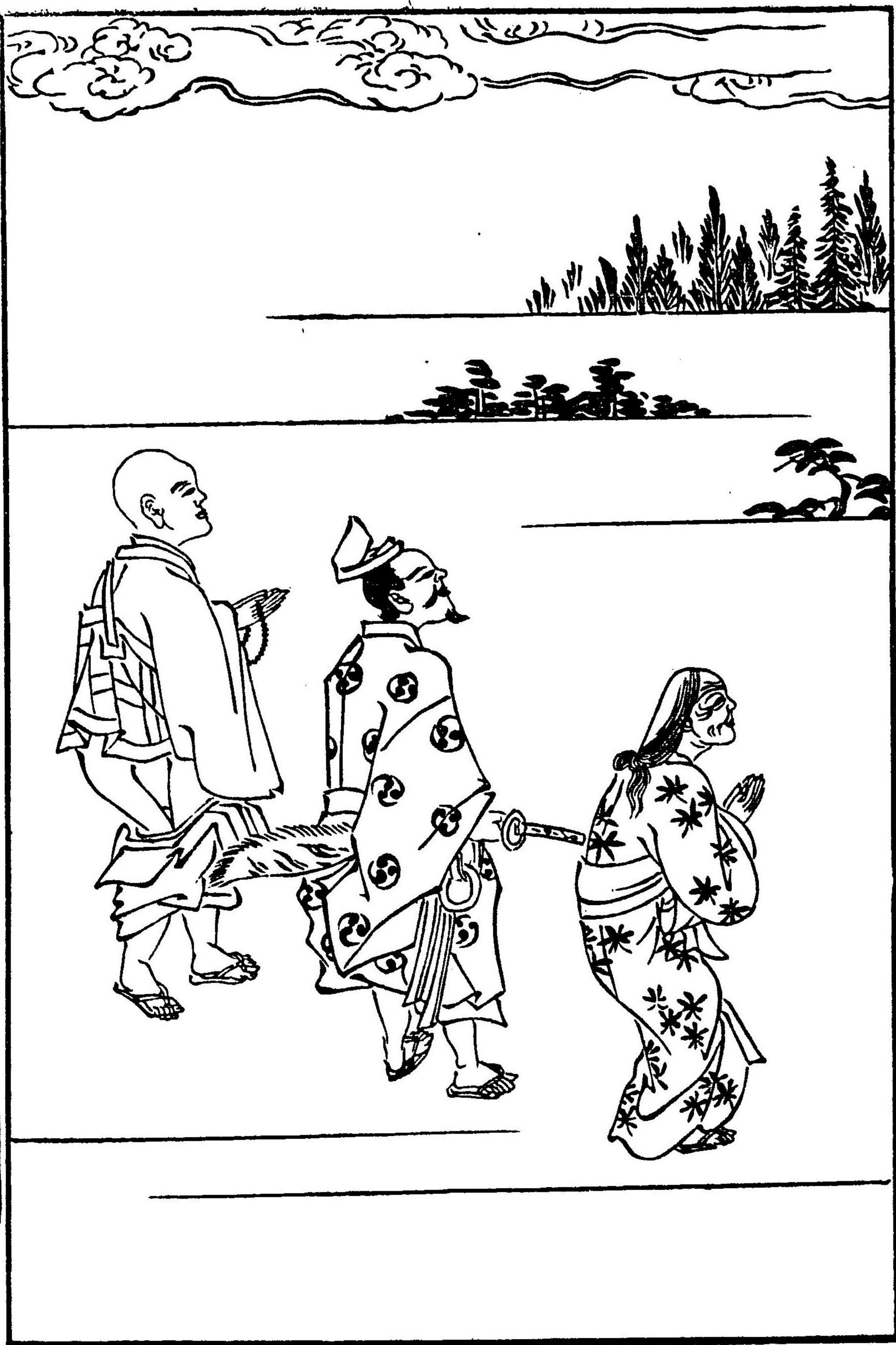
門もん弟てい等らう傍ぼうししくく微び音おんにに法ほふ門もんをを讀よみぎぎららりり。
師し耳に根こんささくくんんゆゆりりくく支え釋しやくをを通とほじじ。
義ぎ理りをを述のぶ給たまふふ。時とき首くびににキきコこウうををびび柳りゆう老らう屈くつ
のの法ほふ病びやう躰たいももスすクくぎぎららりり。門もん弟てい妻さいををむむすすじじ
ててかかららりりぐぐ助すけ音おんしてして師しのの臨りん終しゆうををままととるる。

師し病びやう卧がのの始はじめよりより常じょうにに東ひがしふふむむししくく左ひだり脇わきにに
卧ふ給たまへへりり。あるある人ひと其その故ゆゑをを問とひひままををばばりり。答こたへ曰いは
寂さい後ごの時とき破やぶ咽のどををくくくく右みぎ脇わきにに卧ふささむむがが。
免めんちちりりかか。

七月しちがつ四よ日にちよりより諸しよ方はうのの道どう俗じやく光くわう明めい寺じににあありり
てて紫し雲うんのの垂たりりをを見みんん。ああるるひひハハ微ゐ妙めう乃なり
音おん樂がくののややににひひくくををままりり。



六二



同五日此朝より。ほゞく。頭水面西。右脇
 下。給ふ。先言感をび。くふ。此時を却。給
 するなるべし。

同日晡時に至りて。異香病室に薰。其匂
 ひ。尋常に異なり。時に道證啓して。中はく。
 御住生の於。近づき。給へる。異香漸く薰む。
 こもを。簪給ふ。やと。脚を。まひり。領談。き。ふ。
 同六日酉。尅。異香。ま。か。を。ま。り。実道。又。は。く。

この香を焚給ふこと。師答く爾也と宣ふ。
同日戌刻師傍人蓮身の手を取る。頻々
起むと思ふも氣色なかり。門弟理真問て起
給ふべしと中に師志るも答給ふ其怒を
げく。意にすぎき氣色ちかりれを理真意を
得く。急ぎ相扶く師を起する。師西
向ひく。端坐し五つの糸を取て本尊
顔を瞻仰して。老眼より涙を落し。歡喜の色

形小顯る。是やおまじく。聖迎を拜し給ふま
るべし。爰に蓮身磬子を叩く。道園念佛を
勤めたてまつるに。師まじく稱名を給ふ。其
三百余遍高聲鉢をせめて聞なり。実道再
び念佛を勤めたる。其數も。百余遍あり。
師まじく念珠を轉じ。口々名号をやなす。
轉珠動舌相續して。撓まず。亥刻よりして。
轉珠と呼吸と同時よ止まり。身體柔軟して

生るに異あらず。端坐の面容笑えるが如く
 まむありける。時を弘安十年七月六日亥刻
 あり。御齡八十九歳夏筋八十四年ありけり。





六ノ六

嗟吁。浄土の慧燈既_レ消え。苦海の法船も
 沈_レめり。有待の依界もさう然るべしといへば。と。
 無還の哀別を。今_レしるしにぞ入_レる。遺弟哽咽
 一。士庶悼惜さう。遂に小坪山の麓由比濱に
 一。おいて。茶毘所を營構さう。門弟の四衆相
 集_レりて。葬送の式を行_レなせり。



僧靈俊拜寫





六ノ九

茶毘ぢびきき灰はいままぎぎぶぶてて紫むらさ色いろににくく。五ご彩さい透しゅう徹てつききりり。見み
るるゆゆのの感かん歎たんせせぎぎららいいままののりりけけりり。さされればば或あるハハ骨こつをを乞こ
ひひううけけるる。袂たもとににくく去さるる。或あるハハ灰はいをを裏うらままへへ懐かこにに
ててゐゐるる。其その中ちゆうにに一いつ信しん女にょつつむむ所ところのの灰はいのの中ちゆうにに形かたちちち佛ぶつ
舎しゃ利りのの如ごとくくちちるる。六ろく顆こをを拾ひろひひくく奉ほう持ぢととるるにに。
久ひさかかずずしてして。二に顆こままのの外ぐわい顆こままちちりり。奇き特とくのの思おもひ
をを生せいづづてて。ここののままをを遺ゆい跡せきとと送おくららんん。ああららうう。ああららうう。
門もん弟てい等らう。始はじめくく驚おどろかかすす。拾ひろひひををととむむるる所ところのの遺ゆい骨こつととるる。

果して骨端灰中に舍利を得る。數顆を
 其色種々に。形ち大小にわたり。後よ
 して。此舍利より。分顆して。今も。此
 茶毘所をうがちて。舍利をひろひ得るものあり
 とちしん。

其後遺骨を天照山に納め。西に向て塔を
 建て。門弟等。おのゝ集會して。懇々報恩乃
 佛事を勤修して。





おどろく。師。臨終の如し。中陰の後に至るまで異
香の薫馥まらざるや。二十四箇度あり。衆人悉く。
是をきく。謂く。七月五日酉時。六日酉時。戌時。七日
戌時。八日申時。戌時。兩度。九日午時。と未時。十日
己時。十一日酉時。十二日亥時。と卯時。十三日辰時。
十七日丑時。二十四日辰刻。二十六日丑時。二十九日辰
時。八月五日亥時。二十一日辰時。二十三日戌時。と寅
時。九月十一日申時。十四日辰時。十月三日申時あり。

師。往生の前後諸人の感愛亦一二にあはるべし。
弘安十年二月二十七日夜寅時。教觀愛入るる。
師。頭北面東に。左脇に卧給ふ。南方を足ま
は竹林ありて。金色の光明竹を徹して。庭上
を照しきり。教觀心中におもはる。これ師
の往生の瑞相ありむと。師のいたく。わき起座
さんと。さきも。起を奉るに。端坐志す。西
向ひ給ふ。
私云。この愛相。臨終に命終の形相も亦此の如し。
あはれ。めは相を示し給ふ。決定は生の祥瑞を

證するに時に庭上を凡るに諸人群集して。往生人
多るもの。時に庭上を凡るに諸人群集して。往生人
ありやけらめた。さしきを拜するさまありとん
く。爰は免ぬ。まきり。一言を。バニの利
益にもきて。三悪道を栖とすべ。や。誓言を
ぞ語りたる。

同六月中旬ある信女の爰に金色の光明西方
より来りて。師の室内を照きやえり。

同七月三日寅時道證の爰。淨長三尺許の

阿彌陀佛。真色照曜。師に向ひて。ま
はふやえり。

同夜卯時。道法爰。らく。師。臨終時。りて。

端坐静住。ま。爰。磬子を。念佛

を。勅免。たてまつ。高聲念佛。六遍

に及ぶ。時。威儀具足。僧二人。師の左右

ふありて。念佛。念。來迎の讚を

誦ま。寝ぬ。

師入寂の夜沙彌行性夢とらく。師の室内を
まゝ貴人おほしき絳き袈裟を著せり。偏袒
右肩せり。ほしき貴女あり。花容媚艶とて侍
立せり。行性問ていさく。吾師眠り生ますと
笑。何きの處に在すやと。貴女錦帳の内をひ
きして。みの肉小ありや。宣給ふ。まゝ入りし帳中を
これば。觀世音菩薩袈裟を着して。寶冠を
戴き。左の膝をあげり。右の肩を袒せり。

十一、

其膚黄金の如く。まゝ赤色なるがごとく。行性は
とらく。師既小觀音とちり給へり。願はくは。あ
きすけ給へと。時小師左の方にむかひて。領許し。
はらば。汝を引導せしむと。宣給ふと。入て。眞
たり。行性随喜死涙とらふ。免あへび。すまらし。葬所
に馳来りて。上件の事を語り。此本より。虚言
とらば。年来念佛の功空く。て。忽ち地獄に
墮ちんと。誓言せり。



師入寂の後八月十五日の夜ある婦女の妻小師
臨終の厨子を見るゝ櫻塔かきめぐるて瑤塔
の下に化佛充滿志終るゝ赤門前を足まき無怒
の化佛或ハ虚空一キムラあるひハ地上をあり
てこれ厨子の肉よ入給ふと足ぐる此人目こる
死をたるとき墓を忌む。後世の志少たなく師の
往生を受けざるを敢て参拜さぶき念ともし。
無信愚蒙の一闍提女なりしが此妻を感して

よりキムラまら邪見をあへて。キムラ
常に葬忌を厭ひ憎むゝらともて佛の
に詣で聴法の耳をかこふと称名にんざんも
のとぞちうりになる。いづちる宿因ありたるにや。
抑まら。師が没後の化導をいふべし。

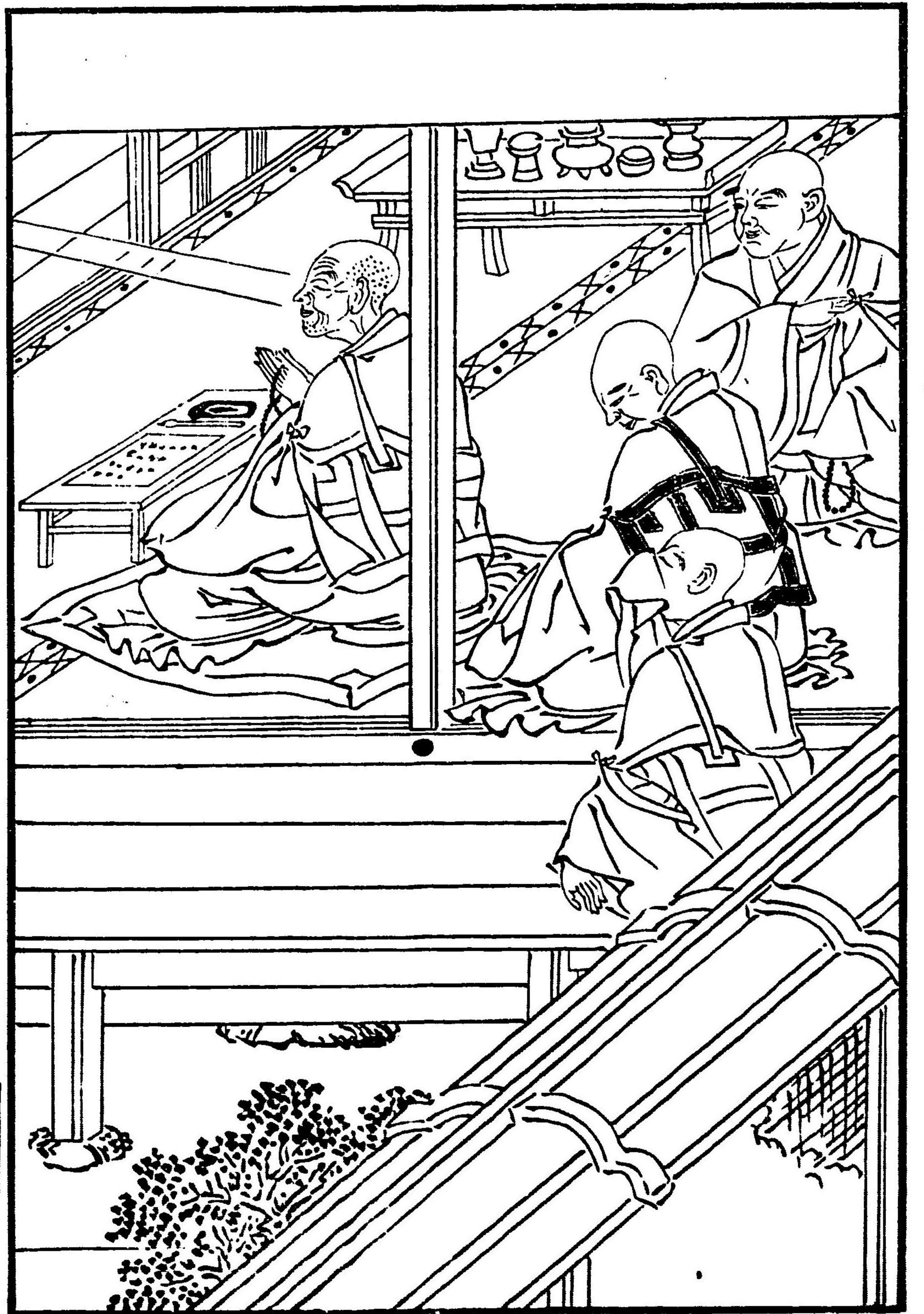
は外。感後おろしやい入む。畧一く。たぶその
三四をらぶて。みせぬ。

正徳六年七月。師の七回忌ありあしうを。
伏見帝師の道香を穿しめされく。記主禪師
と勅謚きしむひく。さき専念の道を弘宣し。
淨教の義を抄記しきし。殊文ある功業を。
叡賞ある標名あるべし。

師の門流親聞面受の弟子多し。中にも
上足とせむる人。六派ありわかれし。於中
白旗の寂惠。ひとり正統を稟承して光明
寺第二世の継席とせむる。ぬ。
寂惠名ハ良曉。亦ハ智慧光と称せり。石見
國の人にして。父ハ園守すか。りし。記主禪師
の舎弟あり。師の俗姓良没あまむ。母ハ詳し。くは。
文永六年。十八歳ありて。台嶺東塔の仙曉法印

に帰し。聖孝法師の許して。菴津一登壇受戒
せしむる。天台の教觀二門。および密教を法華小
受らせしむ。文永八年。關東へ下向して。祿降よ
謂し。遂に弟子の礼を兼りて。東地より苗ま
らきなる。聖九季。淨土宗戒の函脈をお承りて。
陸從始終十八季。慈愛他より及りて。提海
尤等りりり。弘安九年十一月。宗の相傳邊海
ちく。平可を稟受せしめ。傳通記見聞述聞抄

等の著書若干あり。武州白旗縣鴨居の地を
讓共せしむ。きくらくあり。白旗の上人と呼ばるり。
嘉曆三辰年二月。微恙ありて。三月朔日。一偈
を書し。曰。顯露窮夏七十七。夢清天無雲。
法界洞朗と。筆終りて。衆に辭し。脱然と
て坐化せしむ。闇維し。骨を收むるに。灰間よ
舍利數百顆を現し。烟爾として目も輝く。門
受ます。驚嘆し。鎌倉の本山よ塔に。



尊觀亦良辨と稱き。相州穩念の人なり。姓

氏詳し。或云。名越遠江守。幼くして。師の座下

投づく。剃染受戒。管雪の学を盡し。予。

浄教の宗致を穿通せしむる。後、穩念の

名越よりありて。宗教を弘宣し。同所、善導を

を建つ。はけし。四衆を利濟し。まゝ、安養院の

第三世とありて。住持せしむる。安養院は。穩念の二位

行上人より帰依して。長谷稻瀬川の邊に建つ。は年を變じ。禪尼改子の開基。頼

時人

の門流を善導寺流と稱し。まゝ、名越派と

いふ。著書若干あり。正和五辰年三月十四日。示

寂きまじり。

性真号ハ唱阿武州秩父の人なり。藤田の領

主。民部丞利貞の子なり。初にハ叡嶽に登り

教觀を研習し。天台の学修して。秀逸の名

譽を得らる。はよ、昇東に下りて。耆修のつよ

入^い。禪^{ぜん}師^しを拜^{たい}して。師^し資^しの礼^{らい}を兼^とり。浄^{じやう}菴^{あう}の
義^ぎ門^{もん}を練^{れん}究^{きゆう}せしむ。弘^{こう}應^{おう}年^{ねん}中^{ちゆう}。下^げ総^{そう}國^{こく}様^{さう}
嶋^{しま}郡^{ぐん}藤^{とう}田^{てん}庄^{じやう}。岩^{いわ}井^いに高^{こう}聲^{せい}寺^じを開^{ひら}基^きせしむ。所^{しよ}承^{じやう}
の宗^{しゆ}義^ぎを弘^く宣^{せん}せしむ。弘^{こう}應^{おう}世^よ。其^{その}流^{りゆう}義^ぎを藤^{とう}
田^{てん}派^{はい}といふ。下^げ総^{そう}泉^{せん}田^{てん}大^{だい}翁^{おう}寺^じ。武^ぶ州^{しゆう}藤^{とう}田^{てん}善^{ぜん}導^{だう}
寺^じ。相^{さう}州^{しゆう}三^{さん}浦^ぷ武^ぶ村^{むら}東^{とう}漸^{ぜん}寺^じ。三^{さん}州^{しゆう}中^{ちゆう}之^の郷^{きやう}大^{だい}聖^{せい}寺^じ等^{らう}
。弘^{こう}應^{おう}此^{この}師^しの創^{さう}立^{りつ}せしむ。弘^{こう}應^{おう}五^ご壬^{にん}辰^{ちん}年^{ねん}二^に月^{げつ}七^{しち}日^{にち}。
入^い寂^{じやく}せしむ。

禮^{らい}阿^あと然^{ぜん}空^{くう}と稱^{せう}せしむ。姓^{せい}ハ安^あ部^ぶ氏^し倚^いまの^の人^{ひと}なる
を知らば始^{はじめ}と叡^{えい}山^{さん}の永^{えい}存^{ぞん}に從^{したが}ふ。四^し者^{しや}三^{さん}親^{しん}と
繩^{じゆ}維^いの旁^{はう}をつとめ。後^{のち}に禪^{ぜん}師^しを降^{くだ}りて。四^し修^{しゆ}
三^{さん}心^{しん}の道^{みち}を通^{つう}徹^{てつ}せしむ。弘^{こう}應^{おう}北^{きた}仁^{にん}和^わ寺^じ。西^{せい}
谷^{たに}と仰^{おほ}して。志^しきりて。師^し承^{じやう}の旨^{むね}を光^{くわう}闡^{ぜん}せしむ。
一^{いち}条^{じやう}淨^{じやう}華^け院^{いん}第^{だい}四^し世^せ。仰^{おほ}せしむ。弘^{こう}應^{おう}一^{いち}人^{ひと}。
弘^{こう}應^{おう}流^{りゆう}義^ぎを稱^{せう}て。一^{いち}條^{じやう}派^{はい}と名^なづけ。亦^{また}法^{ほふ}光^{くわう}明^{めい}院^{いん}
義^ぎといふ。永^{えい}仁^{にん}五^ご丁^{てい}年^{ねん}六^{ろく}月^{げつ}十^{じゆ}日^{にち}遷^{せん}化^げせしむ。

道光。まつ了慧と号し其所居を標とて望
西橋といひ亦蓮華堂と称せり。世にまよひき
を呼称とる次相州鶴舎の人なり。世姓ハ完
戸氏。初め台峰の寺を築き隨て顯島の二菟
を研覈す。後佐谷の禅師を師とて淨土
の二法を練襪せしむ。洛の三条悟真寺に在りて
稟承の教旨を宣揚せり。故にその流を三条派
とよぶ。無量寿經抄十因記選擇大綱抄等此

著書若干あり。其所立時より師承に遠ふこ
と無よあり。ざれどその支質彬彬々として頗る
眼を拭ふよ足せり。まゝ弘安七年の冬。辨源
の別傳壹巻を草記せしむ。同十年八月。然
師の別傳壹巻を創記あり。正應三庚寅年三月
二十九日。示寂せしむ。後、勅して廣濟和尚と
謚を賜ふ。

惹心ト又乃名ハ良空ハ何モの人ナるを詳ツよギ禪
師ト又隨シひク淨土ノ宗ノ訣ヲを稟承シ山城宇治郡
本幡ノ在テ頻ニ所承ノ宗ノ教ヲを私通スる。
故ニハ流統ヲを稱シへク本幡派トいフ。其ノ所居ニ
精舎ヲを開創ス。いハゆる尊勝寺ト。今名願ノ地藏寺。
阿弥陀寺。道樂寺。地藏院等ナリ。又永五戊辰年
七月八日を以テ寂ス。

六派ノ流孫ト。まニおノ法將ナりて。精舎法
庭ヲを昇リ。紐シとモあマるニなリ。今ハいハまニ白
旗ノ一派ト併属ス。たニ名越ノ一派ト存
在ス。

俊聖トもニ一向トと稱ス。台家ノ僧ノ性質雄豪
の人ナり。師ノ座下ニありて。時機ヲお應ジの法
門ノもニをシ。不退ノ術ヲを勉勵シ。一向專
修ノ教ニ浴シ。休廢ナるニ。弘安十年。

十一月十八日。江州馬場ふありて。立ちまゝ大往
生を遂ぐる。此流きを一向派と唱せり。
禪師の門下。み外に道忠如一等の志風あり
まゝありて。方今其列傳の傳ありあれども。爰に委
悉きるゝもあし。故をまて。さびしく書きたるべし。

記主禪師繪詞傳跋

曩望西樓。著記主禪師傳一卷。支主簡
約。未全盡禪師之化迹也。信每憂之。歛
擴充本傳。博搜索諸鈔之所載。舊記之
所傳。集成六卷。書之。添以畫圖。信固拙
屬文。良運和尚。為之潤色。靈俊上人。專
任繪事。經星霜凡五回。功業成滿。想明

年_二正當_三禪師。六百回_二諱。亦以此_三報_二恩
之_二第一_三云。明治十_二八_三稔七月。未_二齋_三去信。
書_二於_三鎌倉天照山_二禪室。

記主禪師繪詞傳助刻喜捨

金五圓東京增上寺福田大教正前○金貳拾五圓僧某○金拾圓淺草誓願寺
新妻靈俊上人○金拾圓上州館林善導寺蓮波信了上人○金五圓相模真鶴
西念寺垂水良運○金三圓越前敦賀西福寺秋浦定玄教正○金三圓遠州西
傳寺赤澤倫應○金三圓白羽法藏寺吉良說明○金二圓同寺內吉良寬應及
信徒中○金三圓笠井定明寺笠井辨秀○金三圓武州岩槻淨安寺吉水玄達
○金拾圓遠州濱松中村讓庵居士○金壹圓同玄忠寺木村辨立○金一圓同
菩提寺豐川超皆○金一圓信州東寺尾長明寺竹內亮道○金貳圓半泉州岸
和田神原大峻○金三圓武州目黒祐天寺○金三圓東京三田光臺院內藤善
定○金三圓緣山學寮主吉水大智○金一圓淺草貞源寺○金一圓小松川仲
臺院○金一圓淺草誓願寺內長岡治三郎○金半圓駿州沼津乘運寺黑田圓
澄○金五圓羽前山形常念寺○金五圓同天童三寶寺○金五圓同佐藤伊兵
衛○金三圓羽後秋田寺町當福寺○金三圓同所誓願寺○金三圓同所光明
寺○金四圓廣面本念寺○金三圓土崎湊善導寺○金五圓同所滿船寺○金
五圓寺町善長寺○金五圓黑瀨善正寺○金五圓銀山善導寺○金五圓同所
專念寺○金三圓能代西福寺○金二圓六郷町本覺寺○金二圓本庄常然寺
○金一圓同天然寺○金一圓同大竜寺○金一圓同淨光寺○金一圓秋田深
信講中○金一圓同芳信講中○金半圓同川連新太郎○金半圓同高堂永藏
○金半圓同岸政吉妻○金半圓同渡邊祐吉母○金五圓武州木崎正樹院島

谷了章○金二圓越前敦賀善妙寺守中在典○金一圓新道真福寺日種警禪
○金一圓阿曹浦安養寺吉水翁譽○金三十錢乃根福昌寺吉水東嶺○金廿
錢杉著養福寺伊藤真譽○同江良浦福傳寺秦義肇○同葉原增福寺福田淨
戒○同大比田西光寺吉水便說○同阿曾浦福壽院寓某○金拾錢公文名福
智院藤原了運○同砂流圓乘院稻岡澄四○同立石浦海安寺大原詮旭○同
五幡浦西勝寺守中典定○同田尻松岸院義成真成○同御名寶國寺甫里靈
龍○同今庄驛福原澄○同飯留圓覺寺千葉諦念同宇都尾見性道場寓吉水
立欣○金五錢公文名慶音院○同杉津浦海藏院○同松島專安寺○同木崎
寶治院○同關歌溪庵○同池河內昌福寺○同三嶋西隆寺○同同所青蓮院
○同山泉慶林院○同沓浦常福寺○同板取輪光寺○同同所光養寺○同赤
荻善導院同河野浦寓大野惠立○金三錢駄口清光寺○同五幡浦清雲院○
同阿曾浦正覺院○同沓浦萬福寺○同今泉浦福泉寺○金三圓岩代桑折無
能寺矢吹良慶○金二圓郡山善導寺大槻澄心○金二圓萬正寺佐伯祐辨○
金一圓福島誓願寺月形辨宗○金一圓二本松善性寺漆間瑞音○金一圓保
原淨運寺大樹快應○金半圓二本松台運寺工藤琢山○金半圓白川常宜寺
足立吞虎○金廿五錢藤田大千寺岸超天○金廿錢小濱西念寺漆間瑞丹○
同本宮誓傳寺和久井知鄉○金半圓近江中河內西光院守中典山○金十錢
椿坂良福寺吉水祐孝○金五錢厨川長福寺○金二圓下野大澤圓通寺藤波
教雲師○金一圓宇都宮清巖寺星野了教○金一圓朽木管内本宗教職中○

金二圓武州神奈川慶運寺笹本良侃○金一圓半相州浦鄉良心寺伊香輪珠
禪○金三圓相州久比里宗圓寺伊藤素巖○金二圓同吉井真福寺轉法輪戒
珠○金一圓半同鴨井西德寺東鄉諦念○金一圓半同走水覺榮寺近藤真什
○金一圓半久里濱傳福寺鈴木顯善○金一圓半八幡長安寺伊藤行善○金
一圓半大津信樂寺羽端德雲○金一圓半公鄉聖德寺○金一圓浦賀常福寺
增田了達○金一圓半同所法幢寺三浦辨海○金一圓同寺前往三浦辨榮○
金一圓同所專福寺笠木說善○金一圓同所東林寺竹谷學應○金一圓八幡
正業寺中野大豐○金一圓橫須賀光心寺淺羽卓隨○金一圓大津淨林寺長
谷川義誠○金三圓相州長谷高德院樹下信戒○金三圓同長谷寺高橋隆存
○金一圓材木座佐々木心全○金一圓長谷慈眼院永井宣契○金一圓藤澤
常光寺山本達成○金一圓渡內二傳寺鈴樹定祐○金一圓笠間法安寺戸谷
隆恩○金一圓今泉稱名寺成實旭潤○金一圓武州金澤天然寺島岡隆成○
金一圓同光傳寺安田香倫○金半圓同千光寺服部隨波○金半圓相州材木
座千手院長谷川定賢○金半圓同蓮乘院鳥居定慶○金半圓小坪報身院○
金半圓同所野村貞隆○金二圓半相州佐島福本寺犬飼真誠○金二圓半芦
名淨樂寺土川諦孝○金二圓半同南光院○金一圓下山口萬福寺坂口玄慶
○金一圓秋谷正行院菊池辨洲○金一圓上山口新善光寺佐藤學猷○金半
圓長坂無量寺安田香山○金半圓真名瀨光德寺清水德善○金半圓同葉山
相福寺○金半圓三ヶ浦清淨寺○金半圓上山口大昌寺○金七十五錢津久

井法藏院吉水真教○金七十五錢金田圓福寺○金半圓三戶福泉寺三浦豐
 岩○金三十錢小田和滿宗寺輪山義興○金三十錢和田天養院角田貫善○
 金一圓武東漸寺吉田騰海○金廿錢三崎光念寺○金廿錢長井不斷寺○金
 廿錢同長井寺○金半圓三戶光照寺○金三圓陸前塩釜堅信講中○金一圓
 相州沼田西念寺松蔭宜龍○金一圓山王原心光寺吉水靜岳○金一圓平塚
 阿弥陀寺中島在本○金一圓遠州掛川天然寺泉覺慈○金半圓伊豆下田稻
 田寺○金半圓同所海善寺稻田寺西林寺天然寺淨林寺○金一圓相州浦鄉
 良心寺中伊香輪興禪○金半圓信州長野住生寺中水野善豐○金十錢水鉤
 善導寺中北澤隆晃○金二圓東京南傳馬町大村屋總兵衛○金一圓愛宕下
 町杉田金助

明治十八年十月廿日出版御届
 同 年十二月 刻成

著述人

神奈川縣平民

吉水玄信

出版人

東京府平民

吉水大智

相模國鎌倉郡乱橋村木座村早野地
 東京深川區龜住町四十七番地

東京南傳馬町一丁目

大村屋總兵衛

同 南鍋町一丁目

鴻盟社

兌

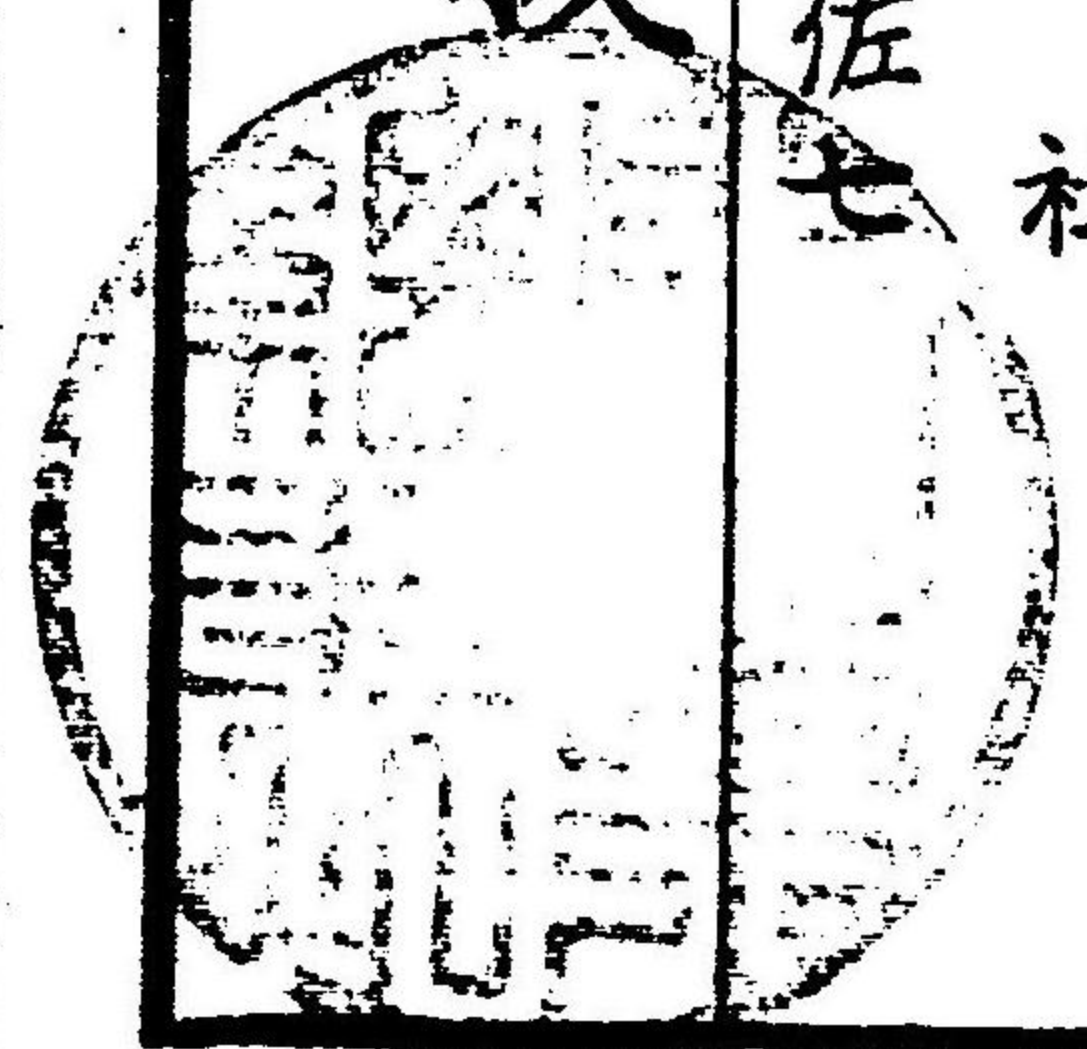
同 三十間堀一丁目

明教社

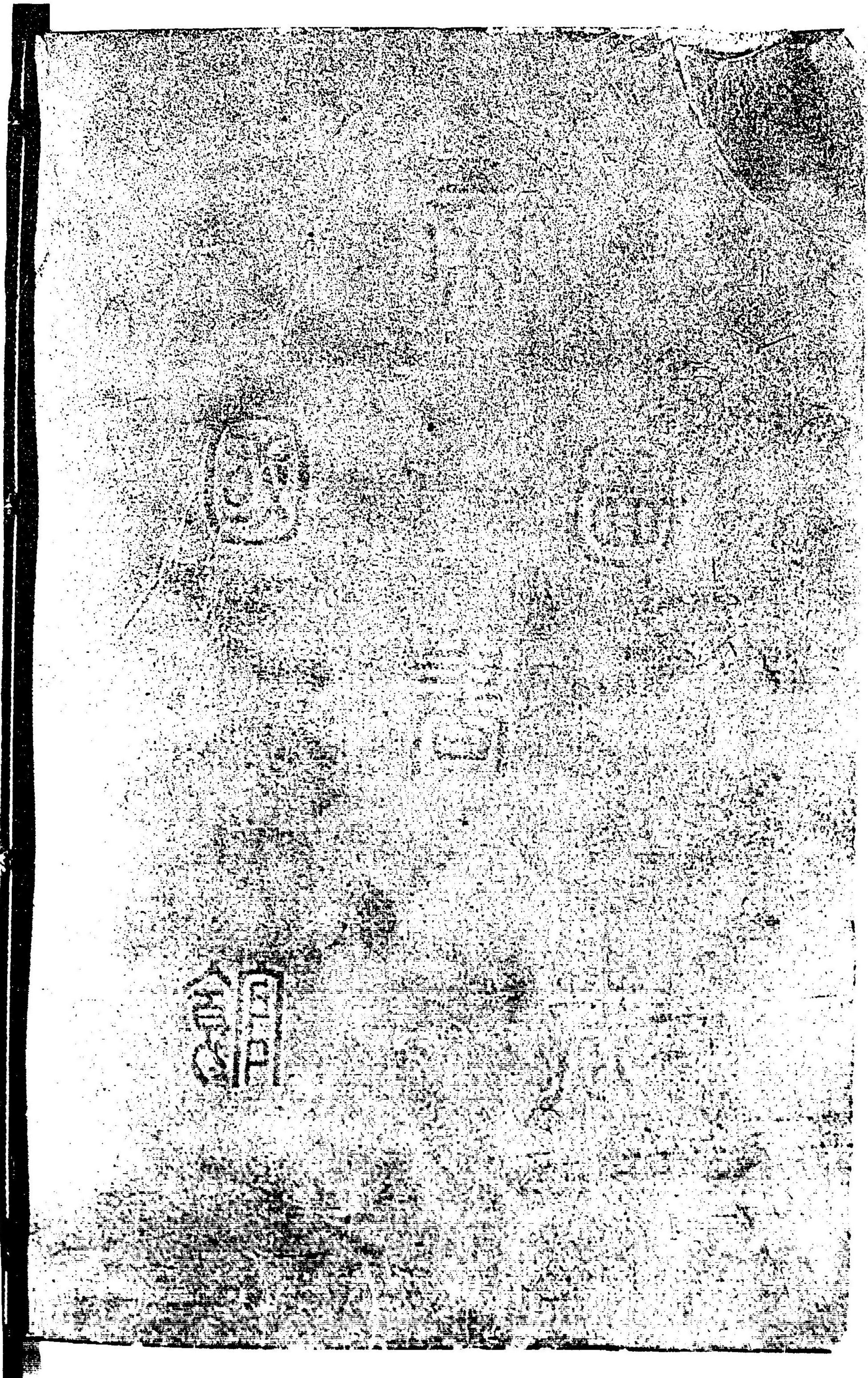
同 芝飯倉町五丁目

山口屋佐七

關東總本山鎌倉光明寺藏板



3
2
182



3
2
182

記主禪師行狀繪詞傳 三六